

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十二年七月廿日印刷
昭和十二年八月一日發行

第三卷 第八號

淨土

八月號



中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ボラルビ付
美麗クロールス装
定價六十錢
(送料六錢)

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を悩ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると信じて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七

◇ 社友の隣 所行發 ◇

改増
訂
版補

信仰讀本

錢三十二 定價 頁〇八版六四 付名假りふ總 著康辨村中

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならぬ。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を開く。『浄土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

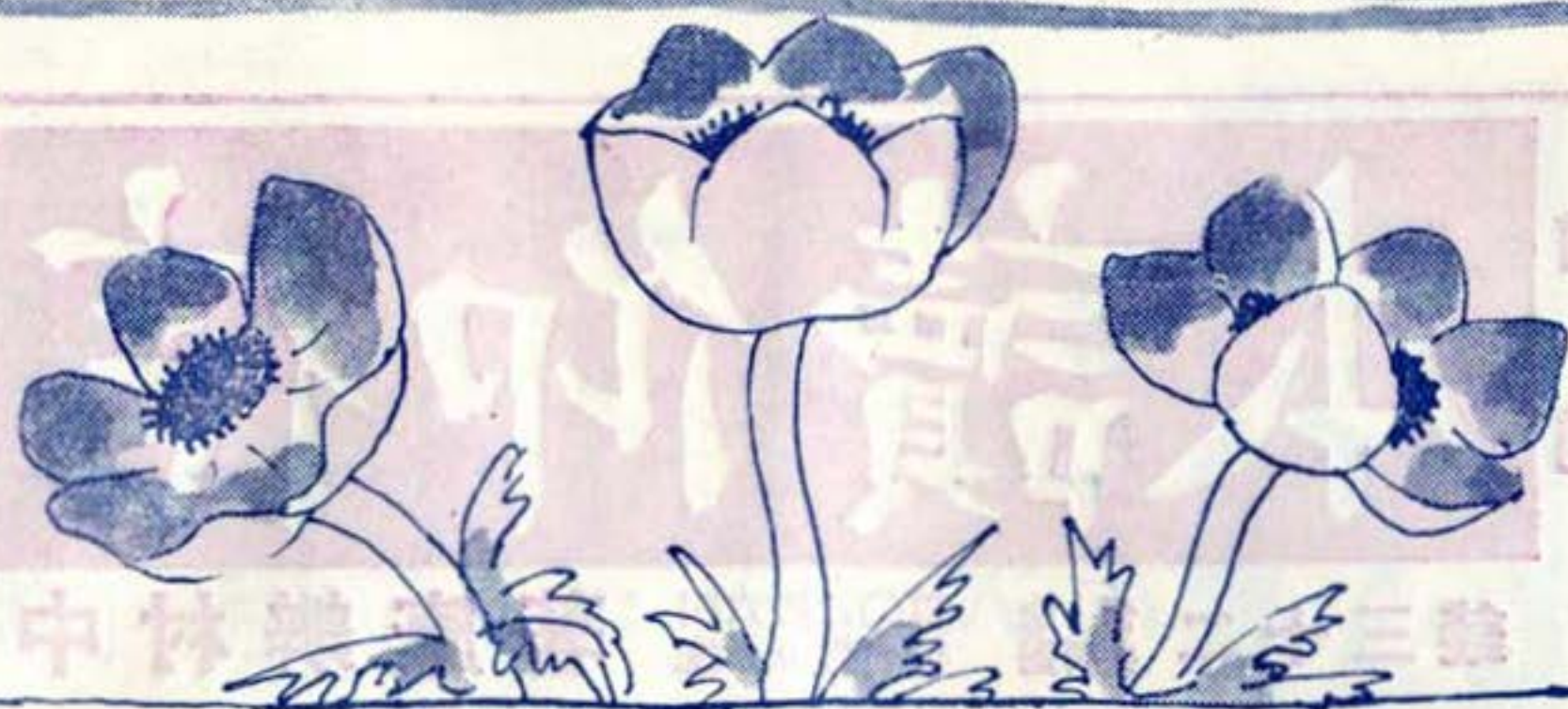
内容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大野法道著 四六判定 價拾八錢
學教授 七〇頁 送料共
法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その嫺々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

◆ 會仰鑽人上然法 所行發 ◆



◇ 浄土 第三卷 第八號 八月號 目次 ◇

・扉・表紙。目次カット……………鈴木金平

説苑

法然上人を慕ふ

文學博士
醫學博士

富士川 游

（二）

隨筆

海邊

紫光

生田 花世（一八）

と

日本の感懷

法然上人のことども

エリザベス・ハンソン（一六）

感想

體験
説話

人生の中心を定める

講道館
指南役

三船 久藏

（一五）

信仰
相談

中村 辨康（一四）

信仰

佛壇を中心とした

本誌記者（一六）

實話

明朗工場を見る

童話

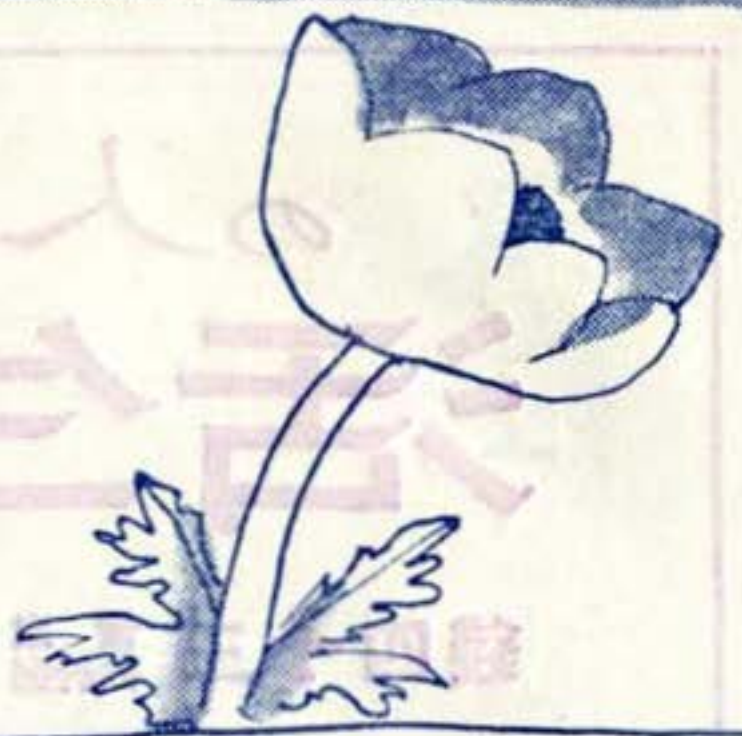
海賊淡路の六郎

畠 四郎（一三）

映畫
物語

仰げば尊し

（一五）



科學者の見た念佛

醫學博士

諸岡

存 (三)

銷夏コント

(七)

- (1) 健吉君の銷夏法
- (2) 猫の尻尾
- (3) 月夜の海底
- (4) 六十の中學生
- (5) 幽霊を見た話

信仰
隨想

コノ道

中野尅子

(三)

歌壇
俳壇

住蓮と安樂

(西田惠泉畫)

飯田光明

(九)

噫する上人

(玉井徳太郎畫)

吉田初太郎

(四)

小消息
講義

信じた上にも信じて行く

中村辨康 (六)

鑽仰運動ニュース
編輯 後記

(充)

(美)

◇ 淨

土

第三卷
第八號

八月號

目次

◇

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 送料別 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。

読んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。二第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

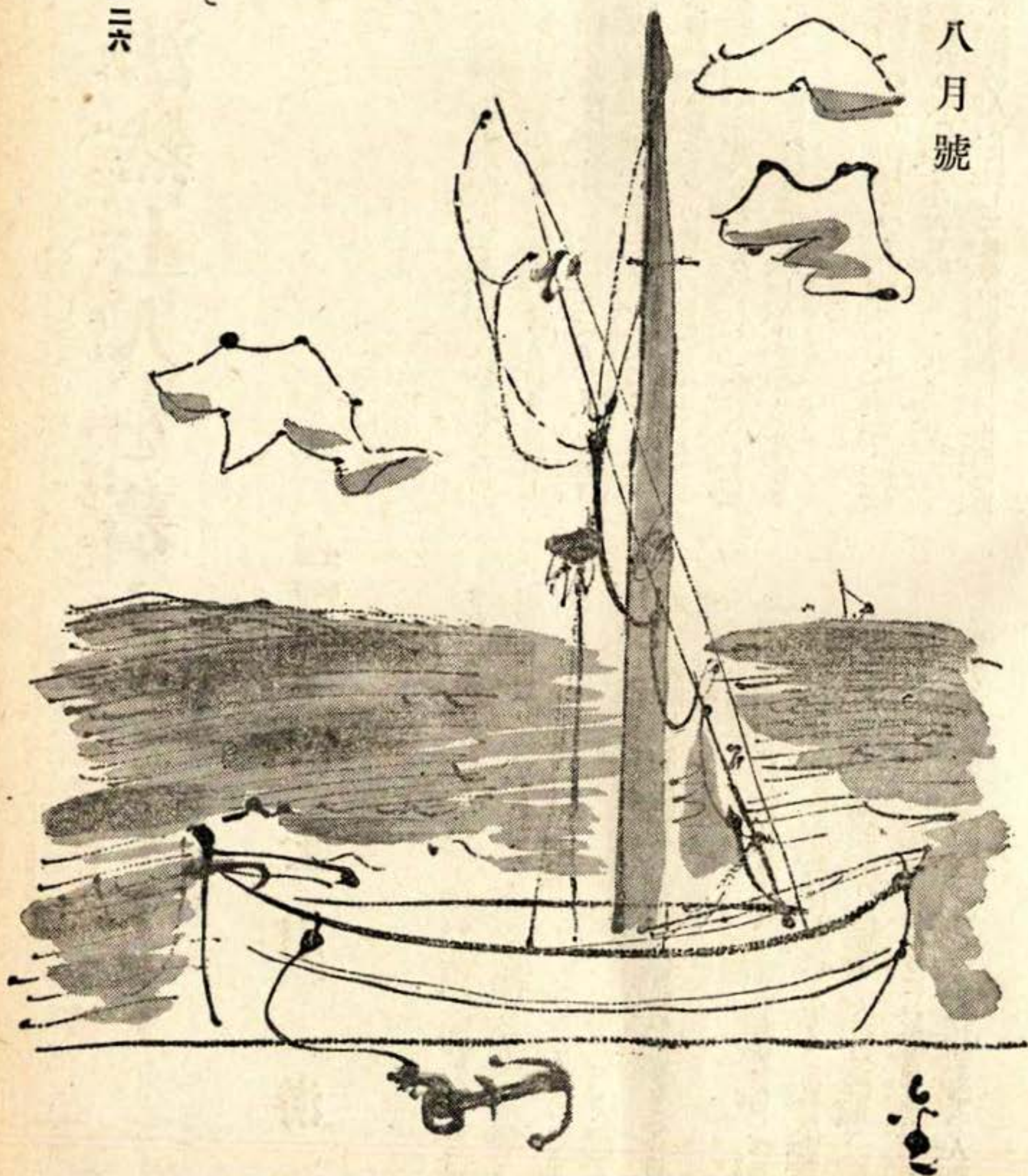
◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

浄土

八月號

問ふていはく
心のすむ時の念佛と
妄心の中の念佛と
その勝劣いかむ
答へていはく
その功德ひとしくして
あへて差別なし

法語抄 一二六





法然上人を慕ふ

文學博士

富士川 游

法然上人が日本淨土宗の元祖として尊崇せられるところの高僧であることは言ふまでもない。圓満なる人格と、透徹したる識見と、法のために身を捧ぐる熱誠とによつて、法然上人が多くの門弟を率ゐて佛教の革新に當られたることによつて今日我々が精神的宗教としての佛教の神髓を味ふことを得るのは、まことに感謝に堪へぬところである。余はこの意味に於て、聊かここに蕪言を陳べて法然上人の遺徳を讃仰しようと思ふ。

法然上人が自身の發心修行につきて仰せられた言葉が法然上人行狀圖第六の中に載せられて居る。これは多分法然上人が弟子達か昵懇の人々に對して自分の發心修行の由來を話

されたものであらうと思ふ。簡單の言葉に過ぎぬものであるが、余に取りてはそれがよく宗教の眞實の意味を理解し、佛教の精神を體得する上に重要なものであると感ぜられるのである。それ故に余はこの言葉を擧げて、法然上人を讃仰する意味を説明しようと思ふ。先づその言葉の全部をここに抄出する。

『出離の志ふかかりしあひだ、諸の教法を信じて諸の業を修す、おほよそ佛教おほしといへども、所詮戒定慧の三學をばすぎず、所謂小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顯教の戒定慧、密教の戒定慧也、しかるにわが身は戒行に於て一戒をもたもたず、禪定において一もこれをえず、人師驕し



て尸羅清淨ならざれば三昧現前せずといへり、又凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし、たとへば猿猴の枝につたふがごとし、まことに散亂して動じやすく、一心しづまりがたし、無漏の正智なるによりてかおこらんや、若し無漏の智劍なくばいかでか惡業煩惱のきづなをたたんや、惡業煩惱のきづなをたたずばなんで生死緊縛の身を解脱することをえんや、かなしきかな、いかがせん、いかがせん、ここに我等ごときはすでに戒定慧三學の器にあらず、この三學の外に我心に相應する法門ありや、我身に堪へたる修行やあるとよろづの智者にもとめ、諸の學者にとぶらひしに、をしふる人もなく、しめする輩もなし。』

いかにも佛教の所説は區々にして煩雜を窮めて居るが、その結局の目的とするところは無漏の正智を獲ることにある。さうして無漏の正智を獲るがためにはその心の禪定を圖らねばならぬ。恰も猿が木の枝から枝に傳はるやうに散亂して取りとめのつかぬ心をばしづめねばならぬのである。又この禪定を得るためには前掲として持戒の堅固なることを要することとは釋尊が唱道せられたことである。法然上人が世に出でられし頃はかやうに佛教が説かれ深刻の觀念と堅實なる修行と

が勧められたのである。しかしながらそれは要するに佛教を哲學的に見たもので、これによつてその心にあらはれるところの現象はただ廢惡修善の道に進むだけのことで、宗教の本旨たる轉迷開悟・拔苦與樂の心境に達することは殆ど不可能であつた。いかにつとめても出離の志を遂げて生死緊縛の身を解脱することは出来なかつた。どこまでも道德の心の世界を彷徨するに止まり、それを超越して宗教の心の世界に出づることは甚だ難事であつた。しかるに法然上人は、深くこの點に留意して

『然問なげきく經藏にいり、かなしみく聖教にむかひて手づからみづからひらき見しに、善導和尚の觀經の疏の一心專念彌陀名號行住坐臥不間時節久近念念不捨者是正業之業順彼佛願故といふ文を見得てのち、我等がごとくの無智の身は偏にこの文をあふぎもはらこのことわりをたのみて念念不捨の稱名を修して決定往生の業因に備ふべし、ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく彌陀の弘願に順せり、順彼佛願の文、ふかく魂にそみ、心にとどめたるなり』

と、かやうに法然上人は仰せられた。かやうにして法然上人



は當時の學者達が佛教を哲學的に見たるものをば一轉して心理學的に考へられたのである。まことに透徹したる識見と言はねばならぬ。哲學的に宗教を見ればその對象の幾多のものにつきて雑多の思索が行はれ、しかもその論議は動もすれば煩瑣枝葉に涉り、たとひそれに本づきて立てられたる規範を實際に行ふとしても、それが道德の範圍を越ゆることは無いと言つても差支ない。心理學的に宗教を見れば、宗教と名づけるものは我々の現實の心の状態で、それは我々が自から自我として執著するところのものの價值を否定するときに、自からにして感知するところの一種不可思議の心のあらはれである。法然上人は深く自身を内觀して、戒定慧三學の器にあらずと、自我の價值を否定し、そこに自からにして感知せられるところの不可思議の心をば佛願の名を以て示されたのである。平易に言へば我々が小智淺慧を以て自然を揣摩することの愚に氣がつきて、その小智淺慧を捨てたところに自然の大智深慧が我々を包容して居ることを感知するのである。さうしてそれを人格的に見て阿彌陀佛の佛願に順ずるところに生死繫縛の身を解脱することが出来ると言はるゝところに、眞に宗教の本旨が徹底して居ると言はねばならぬ。

一言にして盡せば、平安朝の佛教が觀念を主とし、禪定を修め、持戒を貴び、従つて形式に流れ、實際には講經と祈禱との外には何事もなかつたとも評すべき時代の後を打けて法然上人が起りて、從來の一切のものを排斥して斷乎として精神的宗教を首唱せられたる功績は我邦の佛教史上に赫々としてその芳名はまことに千載不磨である。傳教大師が日本天台宗を興して、初めて眞に佛教を日本的のものとせられてからその教義は廣く世に傳へられたが、久しき間、なほ聖道と名づけられねばならぬほどに哲學的・道德的・形式的の教であつた。それが宗教的、内觀的のものとなつて形式的から離れたのは何と言つても法然上人の淨土教に始まつたといふべきである。細目に涉りて論述すべきことはなほ澤山に存するが今は大意を述べて當座の實を塞ぐのである。

法然上人御詠

池の水人のこゝろに似たりけり

にこりすむことさだめなければ

高僧道重上人の苦學時代

順序として明治八年山口の淨土宗鷲巖に入學、同十二年拔群の

道重信教師は明治五年の秋山口講學場に入

學、ここにはじめて學生々活の第一步を印し

たのである。山下現有上人から宗乘、野上運

海、伊藤無關兩上人から餘乘を講授された。

然しその課程も一年で終ると、また寺に戻つ

て來た。その後、師僧の厚意によつて同縣で

碩學の譽れ高かつた仁保領雲師の住する淨名

寺の院代になり、そこで藏書を片づ端から讀

破して行つたが、學のすゝむに連れて、どう

しても京都の大教校に入學しなければならぬ

といふ決心を固められたのであつた。が、間

もなく師僧の遷化に逢ひ、その志も空しく

なつたかに見えた。信教は松月庵にあつて日

夜先師の冥福を祈つた。さうして人に逢ふこ

とさへ厭ふやうに暮してゐたが、一時松月庵

に董することになつた兄弟子登蓮の囑ましに

よつて、やがて研學に復することが出來たのである。

成績で卒業、同時に愈々淨土宗の最高學府たる京都の淨土宗大教校へ進學することになつた。

信教二十四の秋であつた。普通ならば松月

庵は弟子を大教校にまで送れる寺ではない。

兄弟子登蓮が、弟子信教の學費調達のため

如何に悩んだかは察しても餘りあらう。勿論

信教はそれを十分知り抜いてゐる。彼の心は

自分のために莫大の犠牲を拂つてくれた兄弟

子に對する感謝の念でいつばいだつた。

第一に教科書を揃へなければならぬ。京

都に上る旅費の調達にさへ苦しんだ信教には

それが不可能だ。そこで彼は一案をもつた、

夜間同學の友人が眠つたあとで教科書を借り

うけそれを書寫することである。一晚徹夜すれ

ば三四日分の資料が樂々と寫せる。たゞ夜間

寫本に要する灯油と筆墨紙を購入すれば、教科書を買ふべき費用が節約できる。彼はそれ

を實行しだしたのである。

一方彼は規定の學科履修以外に、佛教全般

の奥義を究めたい大願を起し、校内からはや

やもすると異端視される扱ひを甘受して、特

に學校當局に無門限の許可を得て、夜間、泉

誦寺の佐伯旭雅大僧正について俱舍、唯識、

因明を楠玉諦師に華嚴を、金剛宥性師に起

信論を聽講した。當時京都に於ける學場はす

べて疊の用意とてなく、障子一枚ない板の

間で、寒風に晒されながら聽講したのであ

る。

かうして信教の攻學の範圍が擴まると、そ

の學問の満たされるのに從つて、困窮の度は

益々高まつて行つたのである。彼は知恩院の

一室を間借りして自炊生活を營んでゐたが、

朝夕二食を粥ですまし、その粥さへ米がなく

て炊けないときは、人の食へ捨てた蜜柑の皮

を嚙りながら三日間も過したことがあつた。

國の寺から毎月米を送つて來るのであるが、

その大半を賣つては、學用品を買つてゐたからである。(をはり)



日本にっぽんの感懷かんわい

……法然上人のことなど……

エリサヘス・ハンソン

(自署)

サラ大學に醫科を修め、中途文科に轉じ、特に日本文化研究に興味を持つに至つた。

様になり、特に法然上人への思慕は石塚、ユーツ兩氏合著の英文『法然上人』を読んで以來熾烈なものとなつた。

六月末の或る日、そぼ降る梅雨の中を記者はエリザベス・ハンソン女史を九段野々宮アパートに訪ふ。

二ヶ年前來朝して歸國後、『微笑む日本』を刊行して、日本紹介につとめられた。

パートに訪ふ。

日本能樂の研究に深い造詣を持つ女史は、

女史はスエーデン、ストックホルムのウプ

更に最近能劇を徹して佛教研究へと進まれる

異つた視角から聖法然セイントの宗教觀を女史に聴いて見たが、謙虛な女史は唯『今後とも佛敎學者の方々に御指導を頂き、もつと深く上人の敎義の哲學的深さを研究してみたい。』と述べ

るのみであつた。

吉水の法流はスエーデンの親日家ハンスン女史によつていよく海外に廣められるであらふ。(祐)

日本の友人達はしばしば日本に對する私の意見を求める。その時私は日出づる御國は非常に美しいと説明する事を大へんうれしく思ふ。

都市や村落は共に清らかで、内庭か、外庭のある小さなロマンティックな家屋は私が少女時代に讀んだお伽の書中の何かを想起せしめる。ハンスン君日本への蟲惑から——

日本は美しい國である。富士山を仰ぐ時、歌舞伎を観る時、茶道に、華道に、能樂に、其の深き日本的な優美な古典性は其の外に觀るよりも内面に立入つていよく深く、い

よく廣い奥ゆかしさを感じしめられる。

私は今まとまつた日本觀或は日本の宗教觀について述べる事は他の機會にゆづり、思ひついたまゝの二三を述べて見たいと思ふ。異國の女性の立場から

日本の婦人

について、それは優しく、麗しい智的と言ふよりはむしろ情味ゆたかな母性的愛情に親しみを覺える。

日本に限らずいづこの國も同様であるが、婦人の知的發達の男子よりも遅れてゐる事や、或一部以外の婦人の知的教養は一般に男子よりも低いと言ふのは事實であるが、それだけに豊郁たる愛情の豊かさは之を補つて餘りあるものと思ふ。

日本のあらゆる部門に於て感ぜられるのであるが、特に婦人についてもさうである事は封建主義的様相と近代の所謂モダニズムとの相剋が著しく私たち異國人の目を引く事である。歐米に於ては過去を清算して一途に現

代生活への融合に努め、封建思想は清算されてゐるにもかゝらず、日本は未だに過去の生活に捕はれ過ぎてゐる。たとへば婦人が日本髪を結つて洋装をしてゐる様な矛盾を時々みうけるのである。本來の淳美性をよりよく現代的に生かす事でなければならぬと思ふ。特に

日本的なる

ものについて、よく人に意見を求められるのであるが、まとまつた答を述べる事は困難である。日本の第一印象は何と言つても驚異に盡きる。想像の日本と現實に見る日本はあまりにも其の美に於て、其の文化に於て進んでゐる。

勿論日本的なるものは其の地理的、民族的、風族的或は歴史的な差異から生れるもので、かうしたものゝ深い理解を除いてはワンダフルである。

それらの理解は實に現代日本の様相を外から單に表面的に知る事によつてはなされな

い。内面的に思想日本の研究によつてなされるものと思ふ。たとへば日本固有の藝術、思想、文學、宗教の研究特に日本佛教の研究がなされてこそ眞の日本が理解されるであらふ。この意味で私も二ヶ月前から、

法然上人

の思想を研究し始めてゐる。キリスト教などに比して微妙盡深の佛教々義は私たちに哲學的興味をそゝるのであるが、特に聖法然の教義、念佛の宗旨はキリスト教に似て而も哲學的深さと明快さを有する點に於て秀れてゐると思ふ。

佛教は日本國民、特に青年に對して驚くべき教育感化の力を持つものであり、其の力は全國民統一の感情を創造する。而もこの感情たるや日本人の間に非常に強く根ざしてゐる。

日本人は儀禮的であるが冷淡な國民である。と聞かされたが、過去の日本人はそうであつたかも知れないが、現在私が見る日本人は非

常に情宜厚く親切である。特に外國人に對して驚くばかりの親切心を示してくれる。何處へ行つても日本人たちは親切にもてなしてくれるので大へんうれしい。

日本の友人達の非常なる援助によつて、日

本固有の文化研究に關し、日本以外のあらゆる國に於ても學びえないものを學びうる事はこの上もないよろこびである。

最後に貴誌を通じて日本の皆様によろし

く。

一時間の會談を終つて記者はハンスン女史に固い握手を受けて辭した。

女史は記者の送つた「淨土」を愛撫しながら日本研究の希望に輝いてゐた。無邪氣な美しい顔に、茶目な笑をうかべて、『私カタカナを習つてゐます』と言ひながら、達筆を振つてサインをしてくれた。

『桃太郎の繪本を讀んでゐます』とニコリ笑つて暗誦する女史の愛嬌を思ひうかべて思はずほゝゑましくなるのである。

女史は日本の能樂や佛教、特に法然上人の研究が完成するまでは歸國しないと決心を述べてゐた。

恐ろしい勢力的な其の言葉の中には、日本人、特に日本の女性等の學ぶべき多くのものがあると思ふ。日本の女性等は、結婚すれば、已に人生の一段落がついたと悟つてしまふのか、全くに惡落つきにおちついてしまふ。文化の向上はたゞに男性の專賣ではない。寺院の婦女子の最近は實になげかしい停滯の様に思ふ。この事は寺院僧侶の活躍と相俟つて來將大いなる飛躍がなければならぬ。

ハンスン女史は「淨土」を故郷スエーデンへ持ち歸つて日本の法然宗の紹介につとめてくれるであらうが、「美しい日本の法然宗の婦人等は益々研磨修養にいそしんで、女史の親み多い言葉を裏切らない様にして頂きたいものである。



住^{ぢう}蓮^{れん}と安^{あん}樂^{らく}

飯田光明
西田惠泉畫

惠泉

十、起請文連名

— その二 —

眞正面からの凄じい吹雪と闘つて來たのである。そして漸く禪房の坂下にたどりついた住蓮は、初めて安樂房をふり返つた。だが影も形も見えなかつた。雪一色に覆はれた世界、四五間も先に白布が垂れてゐるやうに思はれる粉雪の亂舞である。

「おーいー」

呼ぶ聲だけが雪と風におくられて行くのであつた。

「おーいー」

こんなにも遅れたのであらうかと思ひ、一段と聲を張り上げて呼んでみるのである。

「おーい、おーいー」

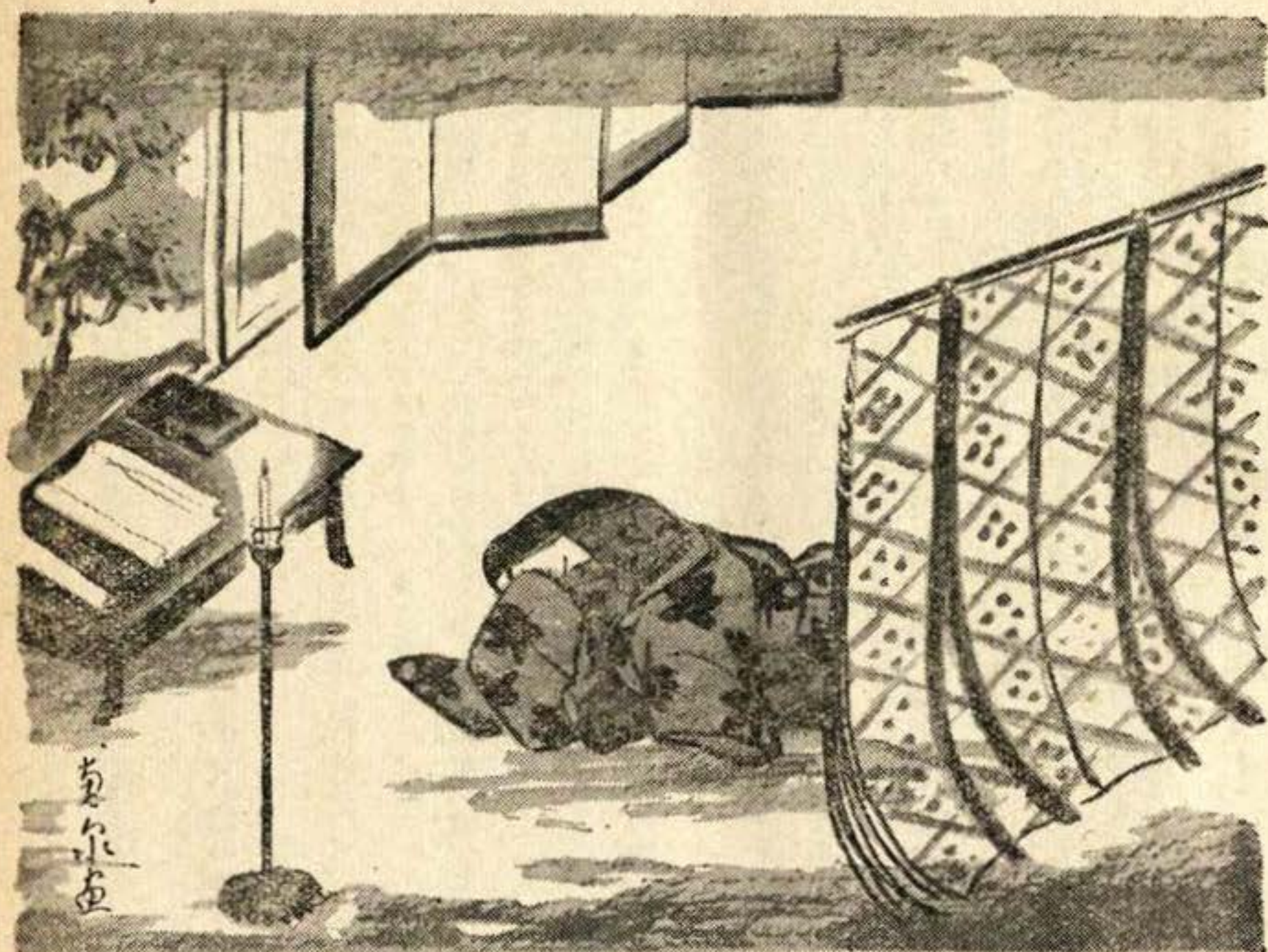
けれど木々に碎ける風の音ばかり。どうしたのであらう、と思ふ心もせわしなく、忽ち吹きとんで又してもかられて行く呪はしい白日夢。山の法師どもが上人の居間に雪崩込んでの狼藉、土足のまゝで踏み込んだ彼等にとり圍まれながら、端然として珠數をつまぐつて居られるであらう老師源空上人の姿、それから右往左往してたゞうろたえてゐることであらう僧房の人達——、さうしたものが一丸となつて臉の中に素早い廻轉をはじめ、そしてそれが煙のやうな粉雪の中に散つて行くのである。

「おゝ、お待ちかねぢや、住蓮どのー」

聲かけられてほつとした氣持、張り切つてゐた心の絃がきれて行くやうな安堵。そこが禪房の式台であることに、彼は初めて氣がついた位である。山の下からはこゝまでの坂道を、猪のやうにかけ登つて來たのである。山の法師の群がる中へこのまゝで割り込んでやらう、力の限り暴れるのぢや、倒れるまで、たはれるまで、精根がつき果てたたとへ息絶えようと、憎くき山の法師ども、そのまゝの姿でかへしてなるものか——、いきり立つ闘志を抱いたまゝでかけ込んで來たのであつた。

だのに、これはまた何としたことであつたらう。無氣味なまでに静まり返つた僧房のなか、何時にかはらぬ木魚の音。狐狸にたぶらかされてゐるやうなものであつた。でもよかつたと思ふのである。力が抜けてしまつて衣の雪を拂ふのもおつくりになり、草鞋の紐を解かうとして式臺に腰をおろしたまゝ吹き荒む雪を見た。老樹の梢に雪と風とが打ち當つては碎けて行く。地に積つた粉雪が、巻き上げられて霧のやうに降つて來るのである。自然の孿猛な狂態。ちつと見入つてゐるうちに目頭が熱くなつてくるのであつた。複雑な感情の吹雪が俺の心にも渦巻いてゐるのだ——、住蓮自身、彼の氣持をどう説明すればいいのか判らなかつたであらう。

「おゝ、待ちましたぞ、住蓮房！」



ちとる小

上人に聲かけられて、住蓮はどつとその場にひれ伏した。涙があふれ落ちる。その目で上人の温容を見守った。慚愧の想に胸がつまされ、上人に詫びようとして聲を絞つてみる、そのころが咽喉につかえてしまつて激しい嗚咽になつてくるのである。今度のこの事件もいはば自分達に起因してのことなのだ、専修念佛の張本と目され、自分では他宗を誹らうなど、夢にも考へたこともない、堅い信念だ、俺達ばかり信念を吐露してゐるだけなのだ、さう思ひはしても、南都北嶺の目から見れば矢張り自讃毀他であつた。

山門の衆徒を憎む心が燃え立つて來るのであつた。それを見すかしてゐるやうに上人が聲をかけられるのであつた。

「何も思ふまいぞ、住蓮房。念佛の興行は迫害によつて新たな生命が植ゑつけられるのぢや」

「お、お許し下さりませ！」

たゞそれだけがやつと言へた。

昨夜から上人のお召に走せ參じて來た同門の面々凡そ四十餘名。證空、源智、信空、幸西、見佛を始め、悉く口を閉ざしてうな垂れたまゝである。彼等はすでに上人から諄々の訓誡を受けてゐたのであつた。そこへ今住蓮が連つたのである。

だゝつ廣い本堂の只中、佛前には香の煙が朦々と立ちのぼり、それが隙間もる風にゆらゆらと揺がつてゐる。

法然上人を圍繞するやうに、ずらつと半圓の形に座をしめた弟子達

の面上には、一種異様な緊張さが漲つてゐる。

御訓誡は懇を極めた。連る人々のあちこちからは咽び泣きのこゑが洩れた。

一、いまだ一句の文義をうかゞはずして眞言止觀を破し、餘の佛菩薩を謗することを停止すべきこと

一、無智の身をもちて有智の人に對し、別解別行の輩にあひて、このみて諍論をいたすことを停止すべきこと

一、別解別行の人に對して愚癡偏執の心をもて、本業を棄置せよと稱してあながちにこれをきらひわらふことを停止すべきこと

一、念佛門におきては戒行なしと號して、もはら娯酒食肉をすゝめ、たま／＼律義をまもるをば難行人と名づけて彌陀の本願を惡むものは造惡をおそるゝ事勿れと云ふことを停止すべきこと

一、いまだ是非をわきまへざる癡人、聖教をはなれ、師説をそむきてほしきまゝに私の義をのべ、みだりに諍論を企てて智者にわらはれ愚人を迷亂することを停止すべきこと

一、愚鈍の身をもちて、ことに唱導を好み正法を知らず、種々の邪法をときて無智の道俗を教化することを停止すべきこと

一、みづから佛教にあらざる邪法をときていつわりて師範の説と號することを停止すべきこと

元久元年 甲子 十一月七日

沙門源空

御訓誡は各條にわたつて懇な引例がさしはさまれて行つた。

戸に碎ける吹雪、さら／＼と音立て、より落ちる雪の氣配、身體が凍てついてしまひさうな寒さであつた。けれど上人の聲には熱がこもつてゐた。聲涙ともに下る御訓誡であつた。時に上人御年七十二。世にいふ七ヶ條の起請文がこれである。

法蓮房信空は、能筆の故を以て選ばれて制誡の條々を書き連ねた。黄紙五枚を横につぎ合せて連名捺印の餘白をもうけ、法蓮房先づ最初に署名した。隣にゐる定生房感聖、相縁房尊西、善慧房證空と並みゐるにまかせて筆がおくられて行つた。

筆が法蓮の手に渡つたとき、彼はすつくとその場に立ち上つた。人はハツとして凝視した。慚愧の念を胸一杯に満たして、法然上人に合掌しての三唱三禮であつた。かうせずには居られなかつたのである。大きく見開かれた兩眼からは涙が玉のやうに落ちた。三唱三禮、人々はつり込まれて同音した。感激にをのゝいたいくつもの聲が、一つの塊になつてどよめきわたつた。

初日七日には信空を上首としてすべて五十人。明くる八日は禪光房澄西以下凡そ六十三名、最後九日には法蓮、上信をはじめとして七十二門下の制誡署名が行はれた。同文同署のもの二通を作製、翌十日にはいよいよ起請文が南都北嶺に一部づゝ進達せられて行くのであつた。使者に立つもの總て十人。一行五人と決められたのである。

人選は容易でなかつた。論に強硬を吐くもの、軟弱を推すもの、しばらくは喧々として鳴りも止まなかつた。愛宗の燃えさかる心情に何

の變りがあらう。誰もが涙して眞劍に使者の人選を議し合つたのである。一宗の興亡を賭けての使者であるものを——

晝近くなつて二班の使者が發つて行つた。前庭に立ち並んだ同門の面々百七十餘人を算した。見送る者、見送られる者が混然と一つの塊になつて坂を下りて行くのである。呼吸が殺されてゐるやうにこゑもなかつた。事態は何時どのやうな變化を起して嵐を呼ばないとも限らぬ——、誰もがさう思つてゐるのである。宗の興亡を賭けた矢が、まさに絃を離れようとしてゐるのだ——。

嘯々と渉る冷たい風。

灰色に曇つた空——

十一、鈴 蟲 松 蟲

——その一——

微妙な音楽でも聞いてゐるやうに、日頃楽しんだ鯛のこゑが、今日は身にしんで悲しく聞えるのであつた。

「鯛、ひぐらし、もう何處かへ飛んで行つてたも——」

人にでも話すやうに、帷の影から聲かける庭。掃き清められて、すでに打水までがせられてゐるのである。森のやうに茂つた木立、その中に幾つもの鯛が鳴いてゐるのであつた。秋立つてから旬日あまり、晝のうちはまだ焼きつくやうな陽の光がさしてもさすがに初秋を思はせる冷氣が帷帳の中にまで漂うて來た。あか／＼と茜さした西の

空、昨日も一昨日もうつとりと見入つてゐた美しい夕焼の空——、耳に楽しく聞きなれた鯛のこゑであるのに——、鈴蟲は悲しくて悲しくてならなかつた。

見まいとしても夕焼の空が見えるのである。淡水色に染められた紋紗の几帳を絞つて、唐衣の袖に顔を覆うてゐても、涙にうるんだ目に茜の空がうつゝた。

「鯛、鳴かないでくれ、鳴かないでたも——」

もうないてはくれるなと頼みながら、頼む鈴蟲自身が泣いてゐるのである。

院の小御所に宮仕へしてからの一歳、こんなに悲しいことは初めてであつた。父の急逝、夢更におもはぬ非業の死が傳へられて來たのであつた。巻繪の文箱にをさめられた母の手跡、それはなつかしい。母に接してゐるやうに思へる。何度でも讀み返したい、けれどあの父が——、と思ふと泣けてくるのであつた。大州の領主稻葉源の尉、押領使としての羽振も機門と相俟つてたいしたものであつた。まだ四十を出たばかりの父、慈愛に充ち満ちてゐた父、人に恨を買ふやうなことがどうしてありませう、間違ひでござります、間違ひでござります——、父を信じてゐるだけに強く否定するのである。けれどあの大州街道の故郷の並木が浮んで來、激しい白刃の亂闘が涙の中に描かれるではないか。

夕暗が迫るにつれて、鯛のこゑが消えて行く。朱と紫が溶け合



つて、それがだん／＼墨色に變つて行く西の空、大州はあの空の下、丸一年來る日も／＼なつかしく眺めた空であつた。

宮仕へのこの身は果報か因果か、すぐにもとんで歸りたい氣持をどう制すればよいのであらう。綱に入れられた小鳥——、どんなに羽ばたきしてみても、自由の天地に飛び立つことは出來さうにもない。身に纏ふ唐衣、または十二單に緋のもすそ、汗衫、柏の綾錦、帷帳の影に暮すせつなさ辛さ。父をおもひ、母を想ふ相間々々に、力一杯の羽ばたきがしてみたかつた。

十七の夏がもう逝かうとしてゐる。内には青春が燃えてゐた。その青春を巾廣い錦の帯でがんじがらめに括りつけてそつと几張のかげに置いてゐるのであつた。

灯が運ばれて來た。

鏡のやうに拭き込まれた廣い廊下を、奥をさがる局や女房が衣づれの音を立てゝいそ／＼と行つたり來たりした。灯がはいると部屋々々は急に活氣づいてくるのであつた。帝御一人をり圍んで、女らしい暗闇が擱げられてゐるのであつた。鈴蟲はなさけないものに思つた。けれど日頃の帝の御寵愛は一方ならぬものであつた。

かつては小御所きつての才色をうたはれた女房、青木庄左衛門の娘更科の部屋付として上つた鈴蟲である。數多い侍女



の中でも、彼女は一番年下だった。中形な典型的な美女で、美しい上につゝしみ深く、娘つばい愛々しさの中にも、やうやく女になり切つたものの腰のやわらかさ、青味がゝつた雪の肌、黒い寶石のやうな瞳、鈴蟲——、さう言つた名前までが帝の寵愛を受ける素地になつたのである。そして今様のお相手に水莖をとつたり、御酒席に侍つては琴を弾ずる日が度重ねられて來たのであつた。

それに近頃はいよく御寵愛が目立つのである。夜のとぼりが降ろされると、決つたやうにお召があるのであつた。だから今、父の非業の最後を知つても、大州まではるゝの道程、幾日幾夜をかけてもの旅路、どうしてお暇がいたゞけるなどと思へよう。

灯は一段と明るさを増して來た。月のない暗い夜が此の中にまではひ寄つて來たのである。

近々と床の下に鳴く一匹のこほろぎ。

「ツマレダセ、カンコリダセ」

さう聞けば聞こえるこほろぎである。幼いとき大州の館で、

「こほろぎはね、ツマレダセカンコリダセ」つて鳴くのぢやよ。

灯ともし頃の縁先で、こんなことを上氣嫌で語つてくれたお父上——、恰度今宵のやうな雨の霽れた初秋の夕暮であつた。あの時もたつた一つの蟋蟀が、姿も見せずにないてゐた——。

美女は感性、感性のゆゑに父を偲び、母をおもひ、蟲一匹のこゑにさへ泣けてくゝ仕方がないのであつた。

泣き續け泣き續けて憐みすごした夜もすがら。そして一夜が明けたである。身體は弾みを失つてゐた。悪夢に壓されたあとのやうに全身が氣だるく、頭の中をまだ去らうともせず、忌はしい幻影がたゞようてゐた。

さげすんだ笑をたゞえて、局や女房の朧たけた姿が次から次へと映つて來、それがヒ、ヒ、と笑ひこけるやうにして消えて行くのである。笑ひ乍らその目線しさ！ 敵意に燃える目々々。憎まれる覺は更にない。女らしい暗闇——、鈴蟲はさう思ふのである。それは自分にも經驗のあることだつた。目に映る朧たけた姿の優美さと、蛇のやうな淺ましい執念と敵意に燃えるこゝろ——、それを呪はしいものは彼女は思つた。

そればかりではなかつた。これはまた何とした素晴らしい諦觀であ

つたらう。所詮は情慾の世界にだけ生きる女、青春が爛熟しきつて、うづ／＼と桂の下にむづ痒く揺れてゐるのを、ぢつと忍び抑へて、来る日も／＼惱ましい暗闘を續けてゐる——。これに思ひ當つたことは何としても素晴らしい悟りであつた。か弱い感性の女にしては不似合な諦めであつた。

父上が妾を招いて下さるのだ——、あらゆる心の錯綜が「父」に結びついて行つた。なつかしい大州のあの山、あの川、繪巻のやうに、故郷の雄大な自然の景物が展げられて行くのである。飛び立つやうにあやしく願ふところ、羽がひじめにされた錦の帯をかなぐり捨て、——、すぐにも青空へ羽ばたいて行きたい氣持。鈴蟲は狂ほしく泣き續けた。

恰度この頃、同じ小御所の同じ館に、獨りもの憂く沈んでゐる年若い女房があつた。

谷間の白百合の楚々たる姿に鈴蟲の美しくさをたとへるなら、これはまた、五月の朝風に露を含んで、冉冉と花蓋をひらく緋牡丹の艶麗さであつた。豊かな肩から腰の線、雪にもまがふ白い肌は、血の色を美しくく散らして微妙な惱ましさを持つてゐるし、黒く輝く大きな眸はきれいに澄んで潤ひをもち、隆くゆたかな鼻筋、二片の嚙肉のやうな唇——、深窓に育つた豪族の女ではあるけれど、不思議なまでの美しくさと、得言はれぬ高貴さに満たされてゐる。齡は十九、名を松虫と呼ばれてゐた。

— その二 —

鯛が鳴き、西の空に茜がさし、そしてこほろぎがすだいた。變化のない佗しい日が幾日かすぎて行つた。

鈴蟲の小さい胸は張り裂けるやうにせつなかつた。父の死を知つてからといふもの、明けても暮ても大州のことが思はれて、狂つてしまひさうな焦々しいころ。それをぢつと殺して機をうかゞつてゐるのであつた。自分ながら大それたことを、と考へぬではなかつたけれど、今はもう堅い決心になつてゐた。たとへ追手に捕まつて八つ裂にせられてもよかつた。力一杯の羽ばたきがしてみたかつた。大川の空まで飛んでみたかつた。

夜毎々々、そつと木立の中に忍び出ては、勝手知らぬまゝにあちこちと出口を探し廻つたことも再三ではなかつた。葉づれの音にもよだつ恐怖、そして定つたやうに打ち沈んでしまふのである。激しい落膽と小御所脱出の焦慮を羽がひじめにして、褥の上に横たはる鈴蟲であつた。冷たい涙が頬を傳うて木枕の絹を濡らす夜が重なつて行つた。待ちあぐんだ機が來た。

闇がぬけて、月の明るい晩だつた。寝つかれぬまゝに、その夜も獨り大州のことを思つてゐた。もう中秋になつた冷々とする夜氣。虫のこゑが降つてゐた。と、突然、全く夢を蹴破る梵鐘の亂打であつた。院に隣る大恩寺の鐘である。息づく暇もない位の亂打であつた。續いて人々のどよめき合ふ雜音、口々に何か叫びながら無數の足が亂れ蹴

ける氣配だつた。鈍い音、牙えた音、それ等が入り交つてもの／＼しく聞える中に、近々と銅鑼が亂打せられて行つた。

「火事！」

「火事！」

小御所の館々も騒然と湧き返つた。手燭を持つた女房や小女のおろおろとした姿が廣い廊下を入り亂れて往き來した。

「御避難！ ご避難！」

小御所警護の武士達が、狩衣の上に太刀など佩いて「ご避難、ご避難」とわめき立てゝ歩いた。

「大恩寺でござりまする！」

「おゝ、あの焰！」

めら／＼と立ちのぼる焰を見て、わつと兩手で顔を覆ひかくす女房や局、手燭をとり上げて歩く警備の武士達、各々が口々に何か叫び合ひながら、雪崩のやうに館を去つて行くのであつた。

火は猛烈を極めた。火の粉が火勢にあふられて高々と上り、火玉が炸裂するやうに、それがまた幾つもの小さな火の粉になつて遠くまで散つて行つた。櫓が落ちる度にド、ド、といふ津波のやうな地唸りがして、太い火柱が立ちのぼつた。そんな時には火になつた櫓皮が、百枚も二百枚も吹きとばされて院の木立の中へ散つて落ちた。手の下しやうもなく人々はたゞ右往左往して騒ぐばかりであつた。

怪く手足も嬉しい感情の發露だつたらう。「早う、早う」と急ぎ立て

る聲を、鈴蟲は頭腦の中に感じてゐた。早鐘のやうにあやしくさわぐこゝろ——。八丈の白い脚絆に對の籠手——、かつては大州を發つときに用ひたものを、今は大州へ歸るのは着くのだ——、さう思へばあの時は華やかな宮仕への生活に撞れて騒いだ胸、それが今は脱れ出ることに喜びさわぐのであつた。白布で幾重にも巻いておいた草鞋の紐も、かうした突差の場合には殊更にうれしかつた。垂布の短い市女笠を左手に、杖を抱へ込むやうにして、間もなく暗い木立の中を忍んでいつた鈴蟲。

天が焼けてゐるのか、地上の火事か見さかへもつかかなかつた。火勢は衰へる氣色もなくつにつて行つた。

耳近く號き合ふ人々のこゑに、鈴蟲は初めて其處が館に近い北の御門であることに氣がついた。何といふ大それた罪——、覺悟は決めたことながら、身を責められる念が激しい恐怖に變つて行くのを耐えまじして老樹のかげを小走りに拾ひ歩いて行つた。

恰度このときだつた。憚るやうな、けれど澄みきつた美しい聲が追ひかけるやうに迫つて來た。

「もし、鈴蟲さま！」

ぎよつとして暗い木立をすかし見る鈴蟲。

「鈴蟲さま、お待ちなさいませ。松蟲がお後をつけて參つたのでござりまする」

「あゝ、松蟲さま！」

海邊紫光

(法然上人
と鬼)

生田花世



海邊の朝は紫の光にかやき、夕方のひと時は朱色に照り見える……。

この間、私は九州の有明の海のほとりのここかしこに旅寝してその朝の紫、夕の朱、紅を、身も心も打まかして、眺め入った。

「龍神」をまつる海邊があつた。それは海によつて、生活をたててある昔からの漁師たちのはからひであるらしかった。

「流死善提」の碑のたつてゐる渚があつた。それは百五十年前の、島原、普賢嶽(雲仙主峰)の噴火に

よつて流死した、多くの亡霊への後で、その土地に住むやうになつた人々の供養であつた。

この九州での旅の一行中にこの土地の一人の僧侶がゐて、方々の寺について、説明の勞をとつてくれた。

その僧は、その名を醜積といつてゐた。その名で、私は、逢つた時から、ある人間味を感じた事だつたが、話せば話すほど、奥行がある人だつた。「無明煩惱しげくして、塵数のごとく遍満す。愛憎違順することは、高峰岳山にことならず」(正像末和讃より)この人間性の要約としての「醜積」を、その名としてゐるこの僧の成佛は、そもくいつ、いかなる時であらう。

この僧が、ある時、東西本願寺分立の時のことをくはしく私に話してくれた。傳教大師、法然上

人、親鸞上人についても、かれこれ、私の質問に答へてくれた。

長崎の土地は、人も知るとほり織田信長時代から、明治初年までキリシタンパテルンの事からして宗教上の大波動を傳統的にうけついでゐるところで、大浦、浦上の天主堂を十重二十重にかこむ、寺と神社の林立といつてよいやうな氣がされる。

ことに、長崎市の目抜のところはさうでもないが、その町はづれだとか、島原南東部一帯の家々は人の目につく軒下に、小さい佛像を、マネキンのやうに、まつつあつた。有家の町並を歩いた時など、白く新しいのは、とにかくとして、古色蒼然たるものの中には、おもはず、深い感動をうけるものがあつた。この土地の昔の人々は、こんな風に、人の目につくところに、自分の家の佛を



出して、極力、キリシタンパレンの嫌疑をのがれようとしたものらしい。それが、今日、子孫の代になつても、そのままのこつてゐると見てよいやうだつた。

浄土宗あり、日蓮宗あり、曹洞宗あり、眞言宗ありで、なかくにぎやかな有様、「見せ佛」こそしてないが、私の故郷、徳島に、どこか似てゐる風景であつた。

九州からの歸りに、私は、一日でも、二日でも郷里へ立寄るつもりだつた。

長崎を方々歩きまはつたほど

歩いてゐないので、私は、いつかいい折に、「阿波名勝案内」の示すところのいくつかの寺々を詣でたいと、數年前からおもつてゐたからだ。

その詣でて見たい寺の一つに、「鬼骨寺」といふのがある。長さ二寸五分周リ三寸の鬼の齒骨があるので、かういふ寺名をもつが、本當は、東海山寶寺院といふのださうな。

寺のある村は、板野郡北灘村大字折野といふところで、この折野といふのも、もとは、鬼野といつてゐたとの事である。

建久二年のそのむかし、私の國の、その北灘村の坂西山に、そんな大きな齒をもつ鬼が住んでゐたといふのである。鬼は、讃岐の鬼が島、丹波の大江山ばかりかとおもつてゐた私は、自分の國にも、鬼がゐたといふのを、とても面白

くおもひ、一度は、その鬼骨を見たいものと考へてゐる。

ところが、この鬼は、慾望のその、もつとも大きいものである延壽の野心をもつた。時、あたかも京都から、女官得度事件から念佛停止、遠流の刑にあつて、法然上人が、讃岐の鹽飽島へ來られるといふ際だつた。

法然上人こと藤井元彦(七十五歳)をのせた舟が、鳴門の潮さきをさけて、北灘村を左に讃岐、引田、志度沖へと漕いでゆく時、それを追つかけてゆく小舟、その中に、坂西山の鬼と、その父母がのりこんでゐた。

鬼は、上人の御舟に近づいて、その念願であるところの延壽、長生の法について、教へを乞うた。その時、法然上人は、波も、その渦潮をとどめるかとおもはれるやうな法力をもつた念佛を、御聲

朗麗に、百遍、二百遍、五百遍となへられた。

按ずるに、上人は、しみじみ、鬼を見て、その「醜穢」煩惱をいたましくおもはれたであらう。佛心の遍滿は、必ずや、鬼の心に、一道の光明を點じたのであらう。伏して、涙を流してゐた鬼の父母は、消ゆるが如く海底に、身を落して了つた。

鬼の子は、北灘村にかへり、坂西山の廓見嶽といふ岬角から、飛び下りて死んだ。

その子供の鬼の齒が、今も、折野の鬼骨寺にあるといふ傳説なのだ。

私の國、徳島(阿波)に、法然上人にからむかうした傳説がたつた一つある。それを私は、珍しくおもふ。

讃岐の鹽飽島とはどういふところであるかそれも私は知らない

が、讃岐にしても、阿波にしても、土佐にしても、伊豫にしても、どちらかといふと、弘法大師にからむ傳説の方が多いのである。

ところが、この、鬼骨寺の開基は、弘法大師で、縁起によれば、もと薬師寺、本尊薬師佛をまつるといふ。

なほ、これは今日、私どもの小見でしかないけれども、讃岐の高松港外にある鬼が島、この鬼が島に住んでゐたといふ鬼も丹波の大江山に住んでゐたといふ鬼も、どれもみな巨大なものであつたらしい。そして、後人の想像をゆるしてもらふならば、それは何れも漂流外人が、山賊海賊をして生活をしてゐたのであるらしい。従つて、前にのべた私の國の鬼、坂西山にゐたといふ鬼の親子も、赤髮碧眼の外人で、そして、海賊であつたのではないだらうか。

今度島原、南東部一帯の土地の人々が四五十人よつて、土地の言葉で話すのをきくと、そのアクセントが、あまりにも外國人のアクセントとそっくりであるのに、私は驚かされたのだつたが、九州、四國、中國のいたるところの海邊の土俗史中に、忘れてならぬことは、この外人の漂着といふ事である。

漂着した外人は、山賊、もしくは、海賊をするより外に、その生活のしやうがなかつたのではあるまいか。

而して外人であり、海賊でもあつたものが、法然上人の念佛のその力づよさに、心身の解脱を感じ、霧散するやうな心の晴れを味つて、海邊を淨土と觀じ、こころよく成佛したのだといふやうに、現代へ翻譯して見ていいやうな氣がされる。

折角、一日でも、二日でも、國にかへりたい氣持だつたのに、都合で、その出來なくなつた私は下關から上りの汽車で、廣島をすぎ、呉にまはり、そこから、瀬戸内海の中でも、もつとも美しいところの、風早の海邊それより、糸崎、尾の道と、煙波を賞しながら、須磨明石へと近づいた。

法然上人、遠流の地、鹽飽島もはるかかなたの煙波の中に、横はつてゐるにちがひなかつた。

しばの戸に朝暮かゝる白雲をいつ紫の色にみなさん

さへられぬ光もあるをおしなべてへたてがほなる朝霞かな

この二つの御歌は、私のいつも愛誦するところの上人の御作である。

長崎の僧、醜積氏も、つねに、法然、親鸞二上人の跡をしたひつゝ、俗事に身をすりへらすと云つ

てゐた。その人の成佛、又、かくいふ私の私らしい成佛も、又煙波の中に——しかし何れも近いのだらう。

家庭とお盆

加藤精神

一、先考妣を始め先亡各靈をして速かに離苦得脱せしむること

二、廻向菩提の淨業を運んで

四恩報謝の誠を致すこと

三、大慈大悲の佛陀の加被

力を信じて疑はざること



短歌

興謝野晶子選

一等 東京 安良岡 昇

煩悩の絶間なき身もみ佛の道踏ま

んとす祖師を頼みて

評 謙遜な態度を以て彌陀の道を行かう
と云ふ作者。祖師の説き給へるにかな
へる御弟子の前途に光暈があらう。

二等 新宮市 奥村 映水

燈臺に上りて見れば黒沙の流れに

多し鰈釣る船

評 紀の海の夏の潮風を頬に受けるやう
な爽快さを讀む者に覺えしめる。正直
に景を寫して憂が無いからである。

三等 宮崎 稻元 改心

夏の夜は山寺もよし樹々を分けほ

ほづきに似る月の昇りぬ

評 おとなしい歌。そして新味もないこ
とはない。

鹿児島 前崎 耕我

いかなればかくもつたなき身の性

ぞみ法の道に踏み入りがたし

新潟 荏原 零兒

智慧つきて人の見分けを子の知り

ぬ母をし見れば戀ひ慕ひ泣く

飯田 中山 弘

散り敷ける花に蔽はれわが庭は月

なけれども白き夜かな

京都 永田 七郎

父に似ず肥れるわが子うま寝して

朝の大氣の中にある時

山口 長岡 見地

わが軒に枝さしかはし繁りたる銀

杏の幹を傳ふ五月雨

奈良 奥田 秋郊

夏のかぜ四方より渡る葛城の堤の

草を敷きて憩はん

東京 喜代子

忘れし木馬の下に伏しながら芝

のあやめの花咲きにけり

新潟 榎本茂一郎

情をば知らぬ君故思はじとすれど

かひなく戀しかりけれ

東京 船越 西良

朝風の入江につなぐ舟の三つ寄す

るともなき波にゆれたり

大阪 永井 隨正

溪川のしぶきにぬれてゆらぎつつ

岩の間に咲く花あはれ

千葉 高橋美矢子

井のものとねむの若葉はねむりた

りわれもことなく一日過しぬ

岡山 横江 史枝

夏草の繁みの中に一人居てふかぶ

か吸ひぬ青き大氣を

大阪 小山 文二

夏柑子わが倚る窓に青く垂れ風さ

わやかに吹き渡る朝

姫路 山本 鏡夢

野の牛が草食みて居る下腹をくぐ

りて低くつばくろの飛ぶ

北海道 花田 順往

繁りあふ青葉かくれのみ寺より木

魚の音のきこえ來るかな

小倉 益田 慧光

くせのごといつも話の終りにはく

らしをかこつ君と我れかな

東京 中村 素玉

こころよく今日ありぬべし晨朝の

勤行そろひ澄み渡りたる

広島 上原 抱地

いねしまま粽とく手に流れくる野

山の香りなつかし病めば

滋賀 本間 秀道

培ひて拓きゆくなり大なる望の園

生夕明りせり

静岡 澤田 岳潤

師のあとを繼ぐ善知識さだまりぬ

この喜びをいかに讃へん



科學者の見た念佛

醫學博士

諸岡 存

現代の教育を受けた青年から観ると、凡そ念佛位馬鹿々々しく、迷信臭いものはないやうに思ふであらうが、それは大變な間違である。

古き例を挙げると、彼の一の谷の戦争で、熊谷次郎直實が、年齒もゆかね敦盛の首を討つてから、急に發心して法然上人の弟子となり、佛道に歸依し念佛三昧に一生を了へたといふやうな事は、今の人から考へると、荒武者の直實に、其麼事のあらう筈がないと、寧ろ不思議に思はれるであらう。が併し、それは、決して不思議でも何でもないのである。年の頃なり、様子なり、吾が子によく似た敦盛の首取る時に、それが

武士の習しとはいへ、如何にも無慈悲に、我子でも殺す様な罪障を感じたに違ひない。この精神的の強い衝擊は、何時迄経つても忘れられるものでない。無慈悲な事をしたといふ懺悔の心は何時迄も消えるものではないのである。

又近い例では、彼の日清戦争の時、大勢の支那兵が捕へられて殺された。その際、哀れにも掌を合せて、命乞ひをした者があつた。それは、日本人から見れば、卑怯な振舞でもあり、軍の掟では如何ともし難い。勇を鼓して刺し殺したさうであるが、その時の顔色が何年経つても忘れられず、寢醒めの折等、まざ／＼と、その支那兵の恨め

し氣な顔が浮んで來て困るといふ事を、其の當人から聴かされた事がある。

此種の事は、古い談にも新しい談にも、世間では非常に多い事である。此はつまり深く刻み附けられた心的印象が何時になつても消えない事の證據に他ならないのである。此種の事は現代の物理や、化學等では未だ説明し難い事で、此麼經驗を持たぬ青年等は、其麼馬鹿々々しい事のあらう道理がないと思ふであらう。殺す可きを殺して、何の悪い事があるかと思ふであらう。殺したのは法規に従つて殺したのであるから、夫が良心に咎められる道理はないと思ふであらう。併し我々の心にも未だ、化學や物理では説明出來ぬ神秘的の深い處がある。手を合せて命乞ひをした人間を殺すといふ事に就ては、それが、敵であるにせよ、憐れを感じぬものはない。それが軍法にせよ、刀をふるつて刺し殺しては、決して良い氣持のものではないに決つて居る。我々

の心の奥底には深い印象をうけるであらう事は、人情のある限り、よしや學問のある人でも、又無い人でも氣の強い人でも又弱い人でもそこに變りはないのである。

この印象が何時迄たつても、吾々の腦裡にこびりついて、機を見ては出て来て、仕事の邪魔をする。これが所謂恐怖觀念である。

これは、其程度こそ色々だが、誰にもあり得可きものであつて、程度の強い時は、始終悩まされて、これが『お怪け』になつたり、『亡魂』になつたりする。つまり、幽霊も、お怪けも、その見る人の心の中にあるのである。

この恐怖觀念を除いてやる爲めに、昔から聖者、賢者がいろ／＼工夫されたものである。併しこれは、華嚴や天台などいふ込み入つた哲理でも、然かく容易に除くことは出来ない。

そこで色々工夫した擧句、戰國時代の無數の熊谷を救つたのが、即ち法然上人其

人であるのである。

世は戰亂の時、弱肉強食で、幾多の罪なきものを殺す可く餘儀なくされる。其際に、其罪業が後迄も頭腦に残つて、恐怖觀念となり、何時迄も夫が人間を悩ますのである。

この、謂はゞ、頭に残つてゐる亡魂を鎮めるのが、法然上人の創められた念佛である。即ち吾々は、自からの罪業にせめられ、恐怖觀念に脅かされる際、念佛を夢中に唱へてゐれば、その意味の解る、解らぬに拘らず、唯だ念佛に夢中になる事によつて、其の心の悩みから遁れられる事が出来る。

況や、念佛の中には、大慈大悲の佛といふやうな廣大なる大思想の地盤が積み上げられてゐる。それで之を唱ふれば、安神が出来る譯である。南無阿彌陀佛といふ六字の名號の中には、一切經の中にある總ての哲理を含んでゐると思へば、それだけで吾等は安神が出来るのである。法然上人が非常なる奮勵によつて編み出された粹が、こ

の六字の名號の念佛である。この名號を唱へる事に依て、即ち安神が出来るのである。

念佛は理論で感情を押し鎮める事の出来ぬ際に、それを鎮め得るための方便である。謂はゞ極めて有効簡易な心理療法である。

一般民衆にとつては簡易といふ事が最も大切な條件である。

世が開けるにつれて、立派な學者も出来る代りに、無知の者も亦彌多くなる。この際深遠な哲理等を述べて見た處で、解る人は却つて少くてそんなものを理解する事のない、又たそんな暇もない人が彌多くなるのである。だから世間が進めば進む程、簡易な方法が必要になるのである。

他力本願である淨土念佛宗が愈々盛んになる所以も、實に茲にあるのである。

世の中が科學的になればなる程、禪宗の様な理屈張つた宗教が反つて榮えないで、これとは反対に、簡易な念佛宗が益々盛んになるのも全く此んな理由からである。

信 仰 相 談

・・・中村辨康師擔當・・・

(本欄への質問はヘガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと誌上名匿は可)

絶対他力と半他力

(問)

私は佛教なんて高尚な事は知らず代々門徒宗の者であります。門徒物知らずと申して唯々御開山の教を信じ南ムアマダブツを唱ふれば善いのだと聞かされて居ますが、中々六ツカシク合點行き兼ねて困つて居ます。

近頃私の家の遠夜に一役僧が詣つて呉れましたので、一寸浄土宗と眞宗との區別のある所を問ひましたが、其人の云はれますのに、今日日本にて所謂浄土宗とは自力の混つた他力宗で、法然上人の説かれたそして其以前に説かれた支那の善導大師等の教たる絶対他力宗とは、

聊か相違する所がある。法然上人の説かれた絶対他力宗の教は、親鸞聖人が相續されたのである。其れで聖人のを浄土眞宗と云ふのである。其れを一寸佩き違へて色々浄土宗派と云ふのが出来上人を元祖としたのであると、然様でありますか。勿論先般遠忌の行はれた三上人の如きは皆中々の學者でもあつたが、親鸞を如來、法然を勢至、聖徳太子を觀音の各化身であるとか教へらるゝが、然様でありますか。法然は親鸞の師であるが法の上では、然様であると申しますが、序に上人と聖人との相違如何? (匿名)

(答)

自力と云ふものがあるでせうか。遠觀すれば他力ならざるものはありません。因果の理を中心とする時、一應「自力」と云ふことも云はれ得ますが、佛教での因果は「縁起」の上から見る因果で、普通に科學や法律や道德で云ふ因果をば「因果假説」即ち秩序をつけ整理をつける便宜上のものとして居ります。殊に浄土教の信仰は救はれないものが如來の本願に依て救はれる關係を「他力に依る」と云ふのですから、其信の中には自力的な氣持はありません。佛教理論の上からは徹底的に云へば自力と云ふものは一つも存在しないのです。が、行中心か信中心かを區別する爲に自力とか他力とかと假りに名付けたもので、自力と思つて居ても本當は他力ならざるものはないのです。ところが法然

上人時代は行中心主義が佛教の通念でありましたから、信心の法然上人の新佛教がよく判らなかつたので、行中心の舊佛教の人達から排撃されましたが、一方には其反對に信中心を考へ過として「一念義」を説くものが出来、甚だしいのは「無念義」を云ふものさへ出て來ました。絶対他力の上から論ずれば、一念さへ要らない「無念義」も出てよい譯で、如來様は徹底的な無縁の大慈悲でまします親様ですもの、何も私達が一度や二度の念佛を申したから、申さないからと云ふ差別待遇はなさらない筈です。だから「一念義」よりも「無念義」の方が徹底して居ます。イヤそれよりも「無信義」の方がもつと徹底して居ます。此方が信じやうが信じまいが如來様の方で拾ひ上げて下さつたらよい譯で、

信 仰 相 談

例へば井戸の中に居る蛙が上に上がりたいたいと思ふ思はぬに拘らず、親切があつたら人間様が片端しから上へ救ひ上げて呉れたらよいと同じ譯です。それでこそ絶対他力宗ではないでせうか。それを「信ぜよ々々」とうるさく云ふなどはまだ絶対他力に徹して居ないからこそではないかと、まあ一應云はれませう。そこでかう云ふ兩極端から、其中間を縫つて行かうとする人達も出て來ました。其代表的なのは覺明房長西の「諸行本願義」と云ふもので、第十九願第二十願を楯に取つて自力修行でも往生が出來ると云ふ信仰なのです。親鸞上人は第十八願中心ですが「三願轉入」と云ふことを云はれて居るのは、一面かうした十九願二十願を主張する人達の弊害を見て居たからであらうかとも思は

れます。それは兎に角として法然上人滅後京都と鎌倉とに此「諸行本願義」が大流行してそれが宛も法然上人の正統派の如く思はれて居たものです。之に對して鎌倉で直接それに反對して第十八願中心の信仰を強く云はれたのが、此程の三上人の中の「記主禪師」と云ふ人でした。其頃親鸞上人は常陸から京都に行かれて「淨土文類聚鈔」とか乃至「一念多念證文」などを御書きになつて居られましたが「一念多念證文」は「一念義」と「多念義」に對する批判で、京都に其頃「一念か多念か」の論があつたことを立證するものです。現在の「淨土宗」は記主禪師の流れで、諸行本願と云ふ自力修行を半分許るして居るのを非なりと訂正し、曲げられた法然上人の「念佛義」を正しく引戻した方で、幸西や

行空の「一念義」にも隆寛の「多念義」にも反して「信を一念に取つて常に念佛する」と云ふ「法然流」を主張したのでから「半自力半他力」と云ふやうなものではありません。次に親鸞上人が「法然上人を勢至聖德太子を觀音」と見て居られたことは「御傳抄」の中にありますが「高僧和讃」の中には「源空勢至と示現し或は彌陀と顯現す」とか「阿彌陀如來化してこそ本師源空と示しけれ」と云はれましたやうに、寧ろ親鸞上人の眼には世間で言ひふらした「勢至の化身」と見るよりも「阿彌陀如來の化身」として寫つて居たことでせう。信ずる者

に取つては其指導者をさう見るのが當然なのです。だから「釋の蓮位」が「祖師上人は彌陀如來の化身にまします」と親鸞上人をも彌陀の化身と見られたとてちつとも不思議ではありません。然るにそんな事で優秀とか相違とかを見ようとするのは飛んでもない誤りです。信の上には凡て「同行」であり「同朋」であつて優秀などある筈はありません。淨土教は「聖者」になるためのものではないからです。親鸞上人の「末燈鈔」にも「故法然上人は淨土宗の人は愚者になりて往生すと候しことを確かに承り候」と云つて居るではありませんか。

法華經と無量壽經

世の唱題教徒は無量壽經は五乘開會の教

にあらず 西方極樂は假立の淨土の最下品也など、一にも二

(問)

信 仰 相 談

にも念佛を排斥し、彼の法華經の序説とせる無量義經の「四十餘年未顯眞實」などよく引證します。一體法華經序説の無量義經は偽經なりとの主張もありしやを聞知せる事もありました。此主張は各界の定説となりましたものか、その邊の消息を逐一教示願上します。

(北海道 念佛至上主義者)

答

法華の三部經をば無量義經法華經觀普賢行

法經と申しますが、支那の天台大師が從來バラバラになつて居た大乘諸經典の中から、法華經を以て自分の宗とした時、一切經を五時に別けて法華經を最上位に置く爲に、釋尊の晩年に説いたものだとして、天台宗を價值付けたものですが、それは弘法大師が「十住心」を立てて一切經を十乘に別ち、法華經を第八位華嚴經を第九位大日

經を最上位に置いて居るとか、華嚴宗では華嚴經を涅槃宗では涅槃經を何れも最上位に置くとかするのと同じ事で、夫々其宗を立てる上に教相判釋と云つて、一切經を其人の見る方に依て批判したもので、其宗に取つては絶對的でありませうとも、他の人に取つては立場が違ふので絶對的ではない譯です。ですから法然上人は「各宗おの／＼に一切經がある」と云つてをられますのは實に卓見だと存じます。つまり見方に依て一切經の批判の仕方が違ふのは當然だと云ふ意味なのです。一體何の經典にしても何かしら其經典獨特なものがありまして、其特長は其經典のみの占有するものですから、其點に於ては何れの諸經典よりもこの經が一番勝れて居ると云へる筈です。さなければ其經典が保存されて

行く譯がありません。永い年月が過ぎる間に消えて行く筈です。小乗諸經典も大乘教の立場から見ると程度が低いと云つて居ますが、公平に見れば必ずしもさうとばかりは云へません。また五時の區別は、平安朝時代に天台宗が盛んであり、且つ法華經信仰は當時功利的な意味で僧間に擴まつて居ましたから、殆んどと云つてよい位、その五時判教が信用されて居たのです。然し明治大正になつてから、印度佛教や支那佛教の研究が盛んになつて、それは實は公平な見方でなかつたことがハッキリ判つて參りました。即ち史的事實の上から、釋尊が五時に分けて話をされたのではなかつた事が判明したのです。ですから「四十餘年未顯眞實」と云ふ無量義經の言葉は史的事實の意味で云つて居るのではないと

見るのが本當です。然るにこれを宛かも史的事實の如く解釋するならば、却て最眞の引倒しに墮ちて仕舞います。また思想的に見ても、方等經典は法華經の事で、般若も華嚴も法華も皆方等部に屬する經典ですから、其方等部の諸經典の中から、般若經、華嚴經、法華經、涅槃經だけを別出して其他の方等諸經典を一括して方等部の中へ扣き込んだのは、實は杜撰な雜駁なやり方で「五時」とする便宜上の分け方に過ぎなかつた譯で隨分無理があります。殊に般若思想は方等諸經典の基礎となるもので「般若經」の「空觀」を基礎として妙有的世界觀を明かにしたものが「華嚴經」であり、其純理論を實際生活上に體現せしめんとしたものが「維摩經」であり、直觀に依つて空を體驗し妙有生活を主張

信 仰 相 談

したもののが「首楞嚴經」であり、それらが菩薩即ち在家を中心として二乗即ち出家を毛嫌ひして居る爲めに其三乗を開會して一乗即ち「誰れでも」と云ふことにしたのが「法華經」でありますやうに、聖道門諸經の思想發展から見れば五時判教の順序の間違ひであることは明瞭なことです。學問的には「四十餘年未顯眞實」と云ふ言葉を釋尊說法の史的事實の如く解釋するのは妥當ではありません。また説時の上から申せば觀無量壽經の中にある阿闍世太子の事件は釋尊の晩年の事です。すから、もし「四十餘年」と云ふ事を史的に取扱へば觀無量壽經は「法華經說法中」に説いた事になります。また信仰思想の上には法華經の普門品即ち觀音の慈悲たる「普門」の「萬人救済」が更に一步を進めて阿

彌陀佛の「凡入報土」を説く「無量壽經」を以て最高頂に達したものと見るべきであります。すから、信仰を中心とする淨土教的發展は、般若經の「常啼大士」や華嚴經の「善財童子」や法華經の「常不輕菩薩」などの求道よりも、無量壽經の「法藏菩薩」を以て最も完全な理想貫徹の姿を示して居ると云ふべきで、若し「西方極樂は假立淨土の最下品なり」と云ふならば、同じ道理を以て寧ろ「法華の靈山淨土は假設上の施設なり」と云はれても仕方がない譯で、つまらない議論を戦はして居るに過ぎません。畢竟立場を異にして居る者が喧嘩して居ること、實に馬鹿氣て居りますから、かうした事はお取上げにならぬ方がよからうと存じます。よく聞く問題ですから少し長くなりましたが、概略を

申上げた次第です。

枕經とはどんなもの

問

人間が亡くなりましたら早速御僧に來ていただいて枕經と云ふ御經を上げて頂きますが、この御經はなんと云ふ御經ですか。また、どう云ふ意味の書いてある御經でありますか御教下さい

(大阪 西田三郎)

答

枕經と云ふのは終夜死者の枕頭で讀經すること、お通夜の勤をなす事を指したのですが、後に終夜讀經したり念佛したりするのを通夜と云ひ、簡単に讀經するのを「枕經」と云ふやうになつたのです。また昔は何事でも夜を徹してするのを通夜と云つたのですが、それが變化して死者の枕もとで夜明しすることを

さして云ふやうになり、今では葬儀の前夜などに一寸讀經して酒食を出すのを「通夜」と云ふやうにさへなつて來ました。御經は別に是と云つて定まつては居りません。

藤崎上人へ

お答へ

「佛性に」就て色々有難う存じます。然し御説の佛性は三因佛性の中の「緣因佛性」と「正因佛性」とを御混同になつて居られるのではないかと存じます。如何でせう。「佛因佛性」の邊から云へば御説のやうに云へないことをなしかと存じます。有難く頂戴して置きます。



筆・隨・仰・信

(一)

何が面白いかというて——「自分を造る」より面白い事はありません。

着物を造りたい、着物を造りたいと云うて着物を澤山作つて、籠箆に一杯仕舞つて置いて、泥棒に盗入られて持つて行かれて了ふことがあります。家を立派に造りたい、家を立派に造りたいと云うて、家を立派に作つても、隣から出た火事にペロリと丸焼けになることがあります。又お金だお金だと云うてお金を造ることばかりに夢中になつて、お金を溜めても、人に借りられたり、自分の息子に費はれて了つて、一生

この道

中野 尅子

の苦心が水の泡になることがあります。それを思ふと

自分を

いゝ人間に造り上げて置いたのは、泥棒に持つて行かれる心配もないし、又隣りから出た火事に丸焼けになることもナイし、盗られることも、落す事もなく、造つて置いた丈は正味自分のものになり、永久に失はれぬのです。

それがどうも、「自分をよくする」といふことには餘り氣がつかず、子供を立派にしたいとか、商賈を立派にしたいとか云ふて一生懸命になつてゐます。

そりや、子供を良くすることもいゝ事だせう。而し、子供く、子供くと云うて子供ばかりを可愛がり、子供の事ばかりに夢中になつてゐて、其子が學校の途中で亡くなつたり、大學を出て「もう、よし」といふところで死んだりすると、もう自分もガツカリして了つて、足腰が立たなくなりまう。其人は、餘りに息子にばかり期待を掛け過ぎてゐて「自分を造る」ことを忘れてゐたからです。さもないければ、子の成人をより見ずに自分は一生、子の養育費稼ぎに働いて、古下駄のやうに捨てられてゆく。これも「自己」を忘れてゐたからです。息子や、娘の一人や二人亡くしたとて、

ソレが何です。五人の子が五人、皆無くなつたとて、「自分」さへ残つてゐや、まだいいぢやありませんか。自分といふ一人さへシツカリ確かであれば、五人の子の分も十分やらさして頂けます。自分の子に自分が食はして貰はうと思つたり、自分が孝行して貰はうと思つたりするやうな、シミツ垂れ根性では何も出来ぬ。もつと「自分」といふものをハッキリするがいゝ。

商賣を立派に造り上げる事も、事業を成功させることも、研究を完成させることも又我が社會、我が日本を強大にすることも勿論肝要です。國家も社會も、家も妻も、悉くを捨て置いて、自分だけ良ければそれでいゝとか、修養して居ればそれで尊いとかいふやうな、ケチな修養や、信仰はしたくない。

而し

家庭を

よくせねばならぬと云うても、一から十

まで女房を世話焼き、子供を叱り、家中を雷のやうに嘯鳴り廻つて歩いてゐたて、コゴトや、意見だけで良くなりません。例へば朝起き一つでも、自分も早やう起き、お前達も、もう少し早く起きて呉れぬかと頼めば、家中の者も、自分について早起きして呉れるでせう。ものは總て、自分自身が先づ、心の中で「頼んで」ゐることです。「願つて」ゐることです。「念ずること」です。自分が斯ういふ方へ進めて行き度いと、深く念じて居れば、その念ずる道さへ正しければ必ずその方向へ、人をも引張つて行くことが出来ます。だから先づ、自分に念願が無く、理想がなく精進がないやうなことでは、人を動かすことは出来ません。

商賣も

ヨソの店より自分の店をはやらかしたいお客を殖やし度いと無理に願つて、わざとチンドン屋を儲つて來て廻らして見ても、

景品を出して賣出しをして見たところで、福引の有る間は、お客さんもヤンサ／＼と押寄せて來るが、福引が無くなればバツタリ止つて了ふ。それは其筈です。店がよくてお客さんが來たのでもなく、又商品が良くて賣れがよかつたのでもなく、チンドン屋がお客さんを連れて來て呉れたのだし、福引がお客さんを引寄せて來て呉れたのです。自分の力でも、商賣の力でもありません。それでは本當の繁昌とは云へません。

金を

儲けるといふても、無理に人を泣かせたり人を怨ましてまで、掻き集めるやうに貯めても、悪銭は身につきません。徳がなく集めて來た金は、お金の方でもいや／＼來たのだからすぐ嫌つて去つて了ふ。厭やで呼ばれて來た藝者が、すぐ嫌つて逃げ出すやうなものです。それは無理もない。伊勢へ行くと、子を産むことを「子を儲ける」と云ひます。

「まあ、いゝ子をもうけなしたなア……」と云ひます。赤ん坊が生れて来る時は、陣痛の力で自然にツルリと送り出て来るから成程「もうける」といふのは自然の勢ひで斯ういふ風に物事の「産れる」ことだと思ひました。

それで「金をもうける」といふのも、自然に、お金の方から集つて来て呉れる、お客さんの方から、どうか賣つて呉れ〜と云ふて千客萬來し、お金を置いて行つて呉れるくらゐ繁昌した時、本當に「儲かつた」といふのでせう。だから、金の儲かる時は樂で、どうして斯う不思議に儲かつたのか知らんと、後でビックリするやうなのが本當でせう。そんな時がさういつも〜あるものぢやないと云ふが、全くソレは一生に一度位、一番自分が「徳」の充ちた時、その徳の力で儲けさして頂ける時がソレです。だから始終「徳」のある——實力のあるやり方をしてゐる人なら、いつでも正確なる利益を着實に上げて行つてゐる筈で

す。ソレが商賣の地道で、正道でもあり、信仰の道でもあります。

製茶をしてゐられる、三河の茶師、俊平さんが

「お蔭と此頃、私の造つたお茶を、問屋さんでも、お客さんでも、値切らずに買つて下さいます。どんな値でも、私の云ひ値で買つて下さるやうになりました」

と云つてゐられましたが、値切られるといふのは自分の方に力が無いからで、自分の恥辱です。値はいくらでもいゝから、どうかあなたの店の品を賣つて下さい、と頼まれるやうにならねばなりません。それ位商賣に「權威」と「信用」とが出来て來ねば本當でない。一銭一厘の値にも自分の生命が賭けてあり、一個半個の品にも、自分の全努力が打ち込んである商品ばかりであつたなら、人は争つて此れを求めろのです。

それ程、親切と努力とが拂はれて居る店だつたら、はやらぬといふ譯がない。即ち商品「は」「自己」であり、自己を「商品」として店中に並べて居るのです。商賣も品物を賣るのでなく、此の「自己を賣る」「男を賣る」のでなければいけません。

「アソコの物なら間違ひナイ」

「アレの仕事なら大丈夫！」

と、品物や仕事を云ふ前に「アレ……」と云うて、自分の人格が先きへ出、自分の人格によつて商品も仕事も信用附けられて行く程、自分の「男」が世間へ買はれなければいけません。損得よりも

「アソコの店の氣分がいゝから——」

「アノ男が好きだから——」

と、自分——といふ人間が他をチャームし自分のフトコロの中へお客さんを引張り込んで了ふだけの魅力と迫力がなければいかぬ。

さういふ「力」がどこから出来るか。それは自分の「信念——日頃の生活」からです。自分の日頃の手振、日頃の言行が、さういふ風に絶対に信用を拍するだけの掛値

のない、本モノになつて居らねばいかぬ。さうなつた時、お金も自然に儲かるのです。

人は、これを、

「運のいい奴だ——」

といふか知らぬが、自分にはよくわかつてゐる。決して「運」でも何でもない。今迄の努力が花を咲いて來たのです。「ボロイ儲け」だなど云うて、ボロイ儲けが、そこに轉つてゐるのではない、粒々辛苦の集積が、ボロイ儲けを造り上げるのです。

人を教育する

のでも、又店の者や傭人を使ふのでも

「今日は忙しいから精出してやれよ——」

と、自分が最高位にゐて命令するつもりではいかぬ。自分が先づ、如來さまから「今日

日は忙しいから、精出してやりにやいかぬ

ぞ——」と聞かされて

「ハイ、精出して致します」

と従つた上で、

「オイ、今日は忙しいから、精出してやら

にやきやいかぬぞ！」

と、如來さまの御命令を傳達するやうな氣になつて云ひ附けると、その命令には一言にして、皆の者も承服して呉れます。

自分から出した命令には「我」がある。

而し、如來さまから出た御云附けには「我」がない。これが皆の者の従ふ理由です。

自分が、心に「祈つて」如來さまへ頭を下げて言つたら、其言には如何なる者も服

します。これが教育の本義です。自分がやつて居らずに、入釜しくコゴトを云つたと

てそりや云ふ事をきかぬ方が正直です。

思想が悪化した、社會が墮落したと云うて、青年や、社會を、被告呼ばりするが本

當に人を非難するだけ、自分がして居りますか。戒心すべきは先づ「自己」であつた。

働かねばならぬのは先づ「自己」であつたのです。それが、自分に動いて居らぬ主人

や、自分自身を教育せぬ先生や、自分自身孝行せぬ親が多かつたのです。自覺への先

導者でなく、墮落への煽動者であつたので

す。

此の意味から、自分が常に上に神を仰ぎ

佛を

信じて、その「み心」に歸依し、その「み

心」から常にさして頂く氣になつて、一々動くとき、初めて他の一切、社會をも、國

家をも全世界をも動かさずには措かぬのです。それは「自分が——」動かすのでなく。

此の「如來が——」動かさずには措き給はぬのです。

我れ自ら「天地の正道を往く——」と自

信に充ちてゐる時、本當の教育も政治も、藝術も、商賈も出来るのです。(續く)

譯の無いこと

『うちの息子にも困つたよ。先日もあるり腹が立つたから「もう貴様の面は見たくない。」とどなりつけたらね。』

『そしたら?』

『すつくと立上つてね、そこにともつてゐた電氣を消しおつた。』

俳壇

大田早勲子



信州 久保田 穰

獨り身の聊か佗し蚊帳をつる

評 作者は結婚適齢期にある人か。それとも何等かの事情の爲めにそれを差し控へてでもゐる人か。とまれ自身で蚊帳を吊らねばならない時の佗しさをつくつく感じて作られたものであらう。「聊か」と云ふ表現の内容は些かであるべき筈であるが、此の場合非常に強く感ぜられるところは反つて逆の効果を生じてゐる。佗しさのしみゝ味はせられる佳句。

愛媛 千葉 長行

山宿の高き枕やほととぎす

評「山宿の高き枕や」の此の枕は如何にも高きうだそれに伴つて如何にも堅さうだ。私も斯うした経験を持つてゐる。蒸熱の外へ置くと丁度よきさうなので、そうして寝たことがある。此の高い枕に木登りでもするやうな恰好で、或は又三等車の肘掛を枕にした時のやうに、頭が寝れて眼が眠れなかつたに違ひない。折からホト、ギスが鳴いて通つたのである。之を聞きえた作苦は何だか眠れない埋め合せがついたやうな氣がして「そゝ」と此の句をものしたものであらう。

西宮 林 伸子

村人の紺紺着て麥の秋

評 麥秋の頃、さる村を訪れたが、通過した際に、野良にゐて働いてゐる多くの人も、村に残つてゐる人も紺紺を着てゐるのを目撃して作られたものか。紺紺と麥秋の頃の麦畑の色彩は非常に地味ではあるが、びつたり来るものがあり、柄も非常に地味ではあるが、作者の感情が力強くでゐる。其の感情の力強く出てゐる所がいゝ。

神奈川 新堀 櫻水

青麥にかゞめば迅し夜の雲

東京 星野 式夢

山寺に人訪れて更衣

東京 間宮春生子

ガレーチに子の遊びる梅雨かな

津久見 石堂柑山生

梅雨闇の玻璃戸に来る蛙かな

新宮市 奥村 映水

藥草の露を拂ひて摘みにけり

大阪 六尾 竹雄

葉櫻のかげいと深き瞳かな

姫路 内海 一音

味噌汁の熱さうれしき梅雨かな

熊本 牛島 琳平

緑滴る五月の山を懸にけり

下關 末永 峰月

つばくらの河原に朝の濯ぎかな

大和國 奥田 秋郊

夏風に吹かれつかれし青葉哉

逗子 眞島 梅作

夕立のはれて出にけり花の蜂

青森 高松 秋水

水上の碧したゝる藤の花

山口 見 地

のび出でゝながき八手や春の雨

小倉 増谷やすを

松の葉の落ちて集ひし金魚かな

新宮 竹中八州子

草ゆるゝまゝに螢の光かな

大分縣 佐藤 一男

畦道や東ねしまゝに残る苗

樺太大泊 庄司 しま

吠え競ふ宿なし犬や夏の月

東京 新田 眞砂

龜の背の乾きて古るや風薫る

同 鈴木 白舟

水蓮の影あざやかに夏の月

飯田 古川八重子

一つ葉の陽の吸ひつきて晴れたる

青森 鎌田 鳥埜

山峽の花に埋れて小村あり

茅ヶ崎 高羽 黄石

いへづとに貝ひたす貝や汐干狩

宮城 横田 又紀

一村は杉ばかりなり鯉職

東京 古宮 可敬

蠅が来て晝寝の顔を歪めけり

伊豫 楠田 満

雀の子頭の上でなきゐるよ

同 田上 清吾

朝霧にとけて白ふや桐の花

青森 石崎 清次

金魚の水かへて出動したりけり

宮城 五島白陵子

汽車の窓一つびとつに夕焼くる

東京 松本 春史

ふるさとの土の香とこそ鮎はねよ

神奈川 永田石筒子

ビスケット五月の雨をふくみをり

同 金子 雅子

葉櫻に緑の月の冷やかに

同 矢嶋 吟石

一つかみの桑をきざみて懸掃く

東京 芝 紫綜

入梅の低き天井に壓されたる



童話

海賊淡路の六郎

畠 四郎
野 水 昌 子 畫

むかし昔、まだ平家の榮えてゐた頃のことです。瀬戸内海を荒しまは

つてゐた海賊の頭に淡路の六郎とい

ふ野武士上りの剛の者がをりました。

その頃、この六郎の名は瀬戸内

海附近はおろか、遠い地方にまで鳴

りひびいてゐたほどにすべての人々

から恐れられてゐました。野良仕事

に出てゐるお百姓さん達の間でも、

一ぶくしながらふと六郎のことが話

題にのぼらうものなら、急に何かに

憑かれたやうに、鋤、鋤をそこいら

に打ち捨てたまま一散走りに家に戻

つてしまふのです。そしてあわてゝ

お燈明を灯して、災の身に及ばぬやうにと神佛に祈りはじめるのでした。

ではなぜ、淡路の六郎はこんなにまで人々

におそれられてゐたのであらうか。それは勿

論海賊ですからその悪名を怖れられてゐたの

に違ひありません。が、同じ海賊の悪名でも

六郎のは特別でした。それは六郎が一度かう

と睨んで獲物の船に襲ひかゝつたが最後、財

寶の掠奪はむろん、乗船の者達は女子供に至

るまで一人残らず海の藻屑にしてしまはなけ

ればすまざないといふ残虐の限りを盡すから

です。そして空つぽにした船の帆柱には「淡

路の六郎」と赤地に墨くろくろと大書した旗

を括りつけて、風浪のなすに任せて船を流し

てしまふのです。六郎の手にかゝつたさうした船は、大抵千石積みといふやうな巨船ばかりでした。その中には唐（支那）や新羅（朝鮮）の船も交じつてゐました。それからもうひとつ六郎が悪魔のやうに氣味わるがれ、怖れられてゐた理由は、誰もまだ六郎の姿をはつきり見た者のひとりもなかつたことです。役人達もいろいろ苦心して六郎の正體を突止め、一日も早く捕へようと焦つてゐるのです。だが、いつも影を追ふやうなことばかりを繰返すにすぎませんでした。それもその筈です。六郎はふだん全くの漁夫の暮しをしてゐたからです。そして部下の者達も瀬戸内海のあつちこつちの海邊や島に散らばつて漁夫達の仲間入りをしてゐました。そこでいざ獲物をさがして一仕事といふときも、十人足らずの仲間を集めるだけで、當りまへの漁船に當り前の漁夫の姿で漕ぎだして行くのです。誰の眼からもこれが海賊船かと怪しまれつことがありませんでした。だが、いつたんこの漁船は獲物にとびついたら大へんです！……

或晴れ渡つた日でした。六郎はいつものやうに五六人の部下を従へ、朝から漁獵を装うて海のうへを彷徨つてゐました。かうしてゐるうちに獲物の船が見つかったら、その船のあとを覺られないやうに附随し、夜になるのを待つて一氣に攻め寄せるが手だつたのです。ところが、その日はなかなかこれとは思ふやうな獲物に出會へませんでした。夕方になつてやつと一艘の旅客を満載した巨船を見つけました。六郎の船は早速追ひかけはじめました。しかし、そこは丁度島や海岸から遠くはなれた海の只中ですし、あたりには他の漁船の影もなかつたので、相手にさとられまいと追跡する六郎は氣が氣でありませんでした。すると自分の船に一定の距離をおいてくつついて来るたつた一艘の漁船に氣がついたと見えたのでせうか、その巨船は不意に進むのを止めて、六郎の船の近づくのをちつと待つ氣配を示しました。

「その船待つてくれい／＼！」といふ高い聲が、向うの船からいくつもいくつもかゝつて來ました。六郎は直ちに漕ぎ手をやめさせ、次の言葉の波間を傳つて来るのを待ちました。

「わしらは難波を指してはるばる九州の海を發つて來たのだが、海路不案内で今夜の泊りの港もわからぬ。それにこのあたりは海賊船の噂も高い。どうか、船頭衆、わしらの泊り所を教へてくれぬか。」

六郎は大膽ですぐ問ひ返しました。

「どういふ方々のお乗りの船かね？」

「商人衆と都見物の百姓衆の家族連れだよ。坊さまもひとりゐる。どこぞ靜かな泊り所がないかな」

暫くの間六郎をはじめ、部下の者達も一齊に相手の船の様子を眺めまはしてゐましたが、大丈夫と見てとつたのでせう、

「この船について來う！」六郎は怒鳴るやうに云ふと、飛んで火に入る夏の蟲とはこのことだ。」と部下の者達に頷いてみせました。部

下の者達は大はしやぎで船をどんどんすゝめました。日が暮れて來ました。

六郎の船が獲物船を連れて行つたところがかねて六郎が根城の一つにしてゐた住民のゐない或島の入江でした。その晩はほんとに明るい月夜でした。さうして頃を見はからつて晝間の親切さうな漁夫達が、たうとう海賊の本性をあらはしたのは申すまでもありません。賊共は手分けをして、寶物を奪ひ、泣き叫ぶ女子供に至るまで海の中へ投げ入れてしまひました。そして例の「淡路の六郎」の赤旗を残して引上げたのですが、六郎がいま自分の船に足を踏み入れた拍子に、ふと眼のまへの波のうへに人間がひとり、何やらぶつぶつぶ云ひながら浮び漂つてゐるのを見出しました。「まだ死にきれないのだな。」かう思つて何氣なしに凝視したのですが、急に六郎は「これはい」と唸つたまま、べつたりそこに坐つてしまひました。さつき他の乗船客と一緒に海に抛りこんだ若い坊さんが、まるでお寺の本堂に端坐してゐるときのやうに、波の上に

きちんと坐りこんで一心不乱にお經を讀んでゐるではありませんか。こんなことは見たことも聞いたこともありません、六郎は釘づけにされたやうに茫然として、生きたこゝろもありません。と、今まで笑ひざわめいていた部下の者達もそれと氣づいて、みんな呆氣にとられた顔になつて黙りこんでしまひました。その間も、坊さんは平氣なもので、波にぢかに坐つたままお經をよみつづけてゐるのです。

しかし、六郎とて今までに恐れといふものを知らなかつた豪の者です。やがて我に返ると、部下の者達を睨めつけて命令しました。

「坊主に出来ることは俺にだつて出来る。とにかく坊主を船に入れろ。それにこゝは縁起のわるい場所だから、どこか場所をかへて早く陸へ上るんだ。」

部下の者達は何か魔性のものにでも觸れるやうに尻込みしましたが、六郎の劍幕があまり凄かつたので恐々坊さんを船の中へ引き上げました。すると坊さんは船に乗つたことがさ

も當然のやうに、板の間に坐りこむとまた澄まして讀經をつづけるのでした。部下の者達はほつとして、だが黙りこくつたまま坊さんから眼を反らすことに努めながら、それぞれの部署についたのでしたが、六郎だけはぐつと腹の蟲を押へ、いつまでも坊さんをにらんでゐました。するうちに、たまらなくなつた六郎は、

「坊主、經をよむのをやめろー」と怒鳴りました。

「はい。」はじめて口をひらいた坊さんは、云はれる通りに經文を俯せて六郎の方に視線を返しました。どんなことも起らなかつた、といつた靜かな靜かな顔つきです。

「俺の頼みを聞き届けるかな？」急に言葉を和げて六郎は云ひました。

「何なりとも。」

「では、あの波乗りの術を授けてもらひたいものだ。」

「そのことですか。あれは術でも何でもありません。有難いお經を讀んでゐたお蔭です。」

「ふん——信心の賜物とでも云ふのか。だが俺にはそんな寝言は役に立たない。俺は坊さんの欲しいものは何でも遣るつもりだ、だからこの兩つの足で海の上を自由勝手に歩きまはれる仕方が聞きたい。」

「よろしい。」坊さんはさう答へて、暫く考へる風をしました。「あなたは私の言を寝言としかとらない。では、私が實際にあなたの手を取つて教へることにしませう。」

「それみろ、それみろ。」六郎はどうやら波乗りの術を授けてもらへることで、すっかり機嫌を直しました。

坊さんは起ち上つて、鰻のところに行きました。そして六郎を手招き寄せると、

「私のする通りにしなさい。」と云ひました。六郎は合點しました。坊さんは六郎の手をしつかり握へながら、いきなり片方の手にもつてゐた經文を海に投げ入れました。月の光で明るい波間を、帯のやうにほどかれた經文がふわふわと漂うて行きます。

「あのお經のやうにすればいいのです。」と坊

さんはつづけました。「然し、あなたは今まであなたのして來たかずかずの罪業の怖ろしさ



六郎の可笑ひが終るか終らないうちに、坊さんは、「さあ！」とかけ聲もろとも、海の中へとびこみました。手を握へられてゐた六郎が、不意を喰つてもんどり打つて、眞逆様に、坊さんと一緒に海に抛りだされたのは勿論です。さうしてそれきりでした。船べりに一かたまりになつて今か今かと眼を睜つてゐた部下の者達も、たうとう六郎と坊さんの姿を再び波の上に見ることが出來ませんでした。經文も、もうどこか遠くへ流れて行つてしまつたのでせう。ただその夜明けごろ、この主人のゐなくなつた海賊船の近所に、遽かの龍巻が起つて、あれよと思ふ間に船は空に吹きあげられ木っ葉微塵になつてしまひました。分捕つた寶物も、六郎の部下の者達も、何一つ後に残らず、やがて又元の靜かな海にかへりました。……

を思はないでせうか？」

「罪業？ 馬鹿々々しい。俺は強いだけだ。」

身だつたのです。(をはり)

あゝ若い坊さんは、實は波切不動明王の化



銷夏コント集

健吉君の銷夏法

東

滋

時は正に盛夏、何處へ行つても
 どうか涼しくなる方法はないか
 と、鵜の目鷹の目の此頃です。

我が親愛なる友人健吉君の銷夏
 法は、これはまた世にも稀なもの
 で、数多い銷夏法の中でも恐らく
 類ない程奇抜です。秃筆を揮つて
 こゝに紹介して、皆様の参考に資
 する所以です。

さて健吉君の銷夏法と云ふの
 は、日本刀と鯉の吹流しとが資本
 で、日本刀を天井から頭とすれ
 すれになる程度にぶら下げ、鯉の

吹流しを壁にはりつけて、以て
 涼を呼ばうとするのです。しかも
 日本刀は一點の曇りもない程砥ぎ
 すまされてゐて—毎日三十分間
 位一生懸命に磨くのですがこれ
 も銷夏法の一になつてゐるのです
 —。見たゞけでも涼氣を催します
 が、注意を怠ると頭によつた
 らうと云ふ状態ですから、尙更
 ツトして寒氣すら湧いて來るの
 です。また鯉の吹流しは風の如く吹
 く度に大きくなつたり小さくなつ
 たりして、宛も水中を泳いでゐる

かのやうに見え、水を聯想させて
 爽快味を味はせます。

だが、笑はないで一寸お待ち下
 さい。かうした珍無類の銷夏法が
 案出された裏面には、一つの憂愁
 に満ちたエピソードが隠されてゐ
 るのです。

健吉君は九州の産。三四年前に
 「出世するには東京に限る。」
 と青雲の志を抱いて上京しま
 した。併し田舎の中學を出ただけ
 の學歴では、青雲の志を満たす
 どころか、就職する事さへなか

なか容易ではありません。大學出
 の學士さんが明日の米に困る時世
 ですから、アチコチの知人を尋ね
 てみても、いゝ仕事は見つかりま
 せん。たゞ時だけは遠慮なく過ぎ
 去つて行きます、それに比例して
 郷里の親戚からもらつて來た金も
 目に見えて減つて行きます。この
 苦境のさ中に東京の熱い夏が
 訪れて來ました。

しかも東京の夏は健吉君にと
 つては始めてです。田舎にゐる時
 は、一風呂浴びて揮—一つのまゝ

表に出した縁臺に團扇片手にノ
ンビリと涼をとる事も出来まし
し、又、田舎の家はだゞつ廣く
一寸した木立もあつて打水でも
すれば夕方はかなり涼しく過せる
のです、あゝそれなのにです、健
吉君の住んでゐる今の部屋は、二
階の四疊半、おまけに屋根はトタ
ン張りときてゐますから、その熱
さは想像以上です。裸にもなれ
ず、打水も出来ず、

「東京はどうしてこんなに暮し
にくかとじやらうか」

と心の底から嘆息すら出て来て
故郷が戀しくなつて來ました。思
ひ切つて田舎に歸らうかとも考
へましたが、郷關を出る時の一
大決心を憶ひ浮べると、さすがに
心がひけます。それに郷土の大先
輩西郷さんに申譯がないやうな
氣もしまして、悲想な決意の下に
踏み止まりました。

この苦衷から生れたのが、上に

述べた世にも例なき銷夏法です。
日本刀は祖先傳來の業物で、長い
間、彼の祖先を鍛えて來たもので
す。鯉の吹流しは今亡き彼の母
が、口癖のやうに「この鯉のやう
にどんな苦勞の瀧津瀬も泳ぎ切つ
て成功してくれ」と云つて、彼に
残してくれた唯一の遺物です、夏
の熱さと就職難によつて困憊し
た身心をこれによつて克服しよう
としたのです。

これによつてこの難關を突破
したのが、彼の精神に一大變換が
行はれました。

「東京の生活には中學の知識な
んか何の役にも立たん。始つから
やり直しだ」と急激に好景氣を見
せて來た或る軍需工場の一職工
になつて、未來の大工場主を夢
みて、男子志を立て、郷關を
出づ、大望若しならんば死すと
も歸らずの背水の陣を布いて、せ
つせと働いてゐます。

猫の尻尾

サガ・カズミ

「猫の尻尾」は三郎といふちゃん
とした名をもつてゐる。しかし、

うちの者は誰もその名をよばな
い。末っ子だから、あつてもなく
てもいゝと云ふわけなのだらう。

それに猫のしつぽは、ほかの兄や
姉とあんまり年がへだたりすぎ
てゐる。下の姉が生まれて、もうこ
れきりだらうと思つてゐたら、ま
る十二年目でひよつこり母親の胎
からとびだした。今年三つである。

母親は「はづかしい子を生んだ」
と世間に吹聴するだけで、ちつと
も愛撫してくれない。女學校二年
の姉だけが、氣の向いたときに、
おもちゃのやうなかはいがり方を
する。けれども、猫のしつぽは人
形ではないから云ふことをきかな

い。するとすぐ肩のところを爪つ
て、こはい顔をする。

でも、猫のしつぽはひとり歩き
ができる。毎日、紙芝居の太鼓が
聞えて來ると、早速うちをとびだ
す。そとに行つても、べつに友達
があるわけではないが。

夏、猫のしつぽは母親と姉に連
れられて、汽車にたくさん乗つて
海に行つた。みんながごちやごち
やになつて水につかつてゐる。海
はかぎりなくひろがつてゐるのに
なぜこんな小さな場所、さわぎ
まはつてゐるのだらう。猫のしつ
ぽは水に入るにはちひさすぎると
いふので、砂のうへにのこされた
ままだ。
母親は大抵宿にゐてひるねをむ

さぼつてゐる。夕飯のたんびに母親は云ふ。

「うちにゐるときにやうに父さんの晩酌の面倒もいらないし、ほんとに壽命が延びる。」

猫のしつぽは父親がゐれば膝に抱つこしてもらへるのだが、と訴へるやうな表情をする。だが箸のかはりにスプーンをもたせられるだけで、姉と同じやうな茶碗をあてがはれ、きちんとすわらせられる。

姉が一日に三度も四度も猫のしつぽの手を引いて海に出かける。

「おんぶしようか。」とやさしい聲をかける。猫のしつぽは頭を振る。ビーチ・パラソルにはいつて姉は視線をあつちこつちにうごかしてゐる。

「やあ」ひよろひよろに瘠せた大學生が、山登りやラグビーの話をして、中にはいつて姉の傍に腰をおろす。すると姉は、「サブちゃん

はあつち」とその時ばかりの名をよんで、猫のしつぽをそとに追ひだす。猫のしつぽは不服を云へない。泣いたつてつまらない。陽の

かんかん照りつけてゐる砂のうへに四つん這ひになつて、何をしてやらうかと考へる。

六十の中學生

川端 祐 輔

朝の電車はギツシリ壽司詰めであつた。乗客の顔は寝不足と押し合ひで血走つてゐる、車掌の鼻

息も相當に荒い。

女、小供が氣の毒なほど押し込まれて小さくなつてゐる。靴をふまれて舌うちするもの、うらめし

返つた。

「いくら電車が込むからつて中學生の切符をお爺さんが使ふなんて不正はけしからんぢやないか。」

車内の視線が一齊に老人と車掌に注がれて來た。一大不正を發見した若い車掌は興憤に、上氣しながら威はあたりを拂つてゐるし、緊張した老人の顔は衆人環視の中で凄愴に青ざめて見えた。暫し沈黙の後、老人は徐ろに懷中より一冊の回数券を取り出した。裏に「××中學一年生大澤銀八（特に假名）六十四歳」と書いてあるではないか。老人は無言のまゝで名乗りを上げ終つて名刺を藏つた。餘勢と興憤のやり場に困つた車掌は、すごくと運轉臺の方に身を移してしまつた。

老人は神保町で下車したので、記者意識を發揮した私も老人について下りた。

「失禮ですが、何か仔細ある事と



思ひまして』

と名刺を出した。『あゝ、讃仰會の方ですか、あんたの所の雑誌は毎月拜見させて頂いてゐます。六十の手習ひで恥しいのですが、寸時調べたいものがありますので、必要で學問を始めた様な譯ですよ。』
『調べ物とは？』『いづれ後でお遊びにおいで下さい。學校が始りますから失禮します。』老人は住所を私に告げて乗替電車にそゝくさと飛び乗つて行つた。物凄く元氣

だ。若い自分が希望もなしに暑い暑いところぼしながら無感興に仕

幽霊を見た話

大木三太郎

事をしてゐるのが情なくなるのであつた。

幽霊を見たと言ふ人を私は二人知つてゐる。然し、どうもその人達の話にはあまり信が置けない。私自身でまだ幽霊らしいものを見たことがないからだらう。

私に幽霊を見たと言つた第一の人の話ではその人は遠く離れた土地で死んだその人のお母さんが、丁度死んだその時刻に目の前に現はれたと云ふのだ。息を引きとつたその時刻だと云ふのは勿論後から判明したのだが、これは死霊とも生霊とも付かないものだが幽霊には違ひない。この話をした人も數年前に死ん

だ。尤もその人の幽霊は私の處に現はれなかつた。親子程に親しくはなかつたからだらう。

第二のは僕の父親である。この話はうまく纏めれば大衆小説になりさうな話なのだが、私にはそんな才能もなし、今は長くなるから止めて置く。が、私の父は既に八十三歳で、老人の話には講談趣味の造り話が多く聞いてゐて面白い話でも、本氣にしてゐると後で飛んだ目に逢ふから、私は何時も出駄羅目七分に聞いてゐて、この怪談も本當にしない。

それからもう一人は、矢張り友達で、確かに火の玉に追ひかけられたと云ふのだ。處は横濱の山の手で、墓地の近くだつたさうだが夜路を歩いてゐると、突然火の玉が地を這つて来て、彼に飛び付いて來た。彼は膽を消して逃げ出したが、途中で彼を追ひかけて來た例の火の玉が、矢張り同じ道を散歩してゐた若い男女連れの方に飛び付いて行つて、その人達がきやうと悲鳴を擧げたのを聞いたと云ふのである。お蔭で彼は助かつた譯だが、途程嫉妬深い火の玉だつたと見える。その友達はその後五六年して胸を患つて死んだが、彼の死と火の玉事件とを結び付けると因果話が一つ出來上るのだらうが、それにしては私は彼の死の事情を知り過ぎてゐる。そしてこの話もどうも「怪談」としては信じられないのである。どの話も「正體見たり枯すゝき」的なさげが付いてゐないのだから、本當にしていゝのだらうが、私にはそれが信

じられないのである。

尤も母親や姉や親友が死んだ時には、私も幽霊を眞面目に信じなくなつて、一度出て来れば良いと思つたことであるが、合憎そんな時には一寸も出て呉れないのである。これが私の幽霊に對する不信用の第一の原因かも知れない。

尤も私が十九か廿の時、夏のこと蚊帳を釣つて寝てゐると、眞夜中にその蚊帳の外にぼんやり

月夜の海底

一瀬直行

月が右に傾いて來た。星は雲間から輝いてゐた。月はとき／＼薄い流れ雲に隠れ去つた。小舟を岩かげに漕いでいった。

波はなく海面はおだやかで、遠く洋上はかすんで見え、涼風が

白く人影が立つてゐるのを見たことがある。その瞬間、おや幻覺だなど思つて涙と見詰めてゐる中に消えてなくなつてしまつた。翌朝になつても何んの變事もなく、誰れの死んだと云ふ知らせもなかつたから、勿論幽霊ではなかつたのだらう。第一ちつとも怖くなかつたら、それだけで幽霊たる資格は缺いてゐた譯ではあるが。かくて自分自身の幽霊話にも信がけないのである。

靜かに流れた。漕ぐのを止め小舟のへりから海底を覗いたら、その深さの程が知れなかつた。丁度岸に聳える山が月の光りで海底に影を沈め、視線を這はせると、一線をひいて、岩底が青白く透き通つ

て見えた。岩面の細かい凹凸が影のあやを作つてゐた。それをちつと舟べりから覗き込んでゐるうちゾツとする寒氣が全身を襲つた。

こんな底知れぬ冷さに出會つたことはない。月影を浴びて小さな魚が泳いでゐる。一方の岩と岩の間からは海藻が靜かに揺れてゐる。魚の泳ぐ音が聞え、海藻の揺らぐ音が聞える。そこに舟を浮べ何時までも何時までも、ちつとしてゐることがも早や出来なかつた。この冷い恐しさに身をふるはせつ、又一方、一時も早く逃げ出さうとする恐れと、それをたゝかひ負かしてやりたいと云ふもう一つの心の構へが向き合つてゐた。海面に顔を付け海底の神秘を覗いてゐた。が、矢張それにうち向つてゐることが出来ず直ぐ眼をつぶつてしまつた。そこにさうして尙暫らく舟を止め、海底に齒向つてゐたら、きつと死んでゐる。あの

青白い底の中には死の床が整へられてゐる。あの冷い恐怖の中なら、日頃無意識に求める懷に樂しく死ねると思つた。

そこは沼津からバスで海岸に沿うて行き、靜浦の少し手前、小さい淋しい漁村であつた。そこから夢中で逃れ、舟を漕いでゐたら、岸邊の漁師の明るい二階から若い娘の流行歌をうたふ聲が海上に流れて來た。月は山のかげに隠れてしまつた。八月も中旬を過ぎてゐた。

月のない海上へ出、舟べりから手を海水にひたしてゐると、指と指の間に細かい銀白の光りが粉末のやうにとび散つた。光る海蟲が無數にたゞようてゐた。一寸くひの海水の中にも青白い光りが舞つた。逃れるやうに舟をもどすおのれを、この時程嘆いたことはい。この時程あさはかにおのれを見返したことはない。

夜

路



人 上 る す 嚏
ん に うやし めさく

郎 太 初 田 吉

畫 郎 太 德 井 玉

清々した瞳で、靜かに笑つて見せた娘の千枝である。微塵、取亂し

た風もなく美しく、更けて見えたのも夜眠のせりばかりでないと思つてゐる。

「お案じなさるな。御都合の日まで幾日でもおあづかり申しますと

も——」

さう深切にいつてくれた寮の主人高崎與兵衛の言葉を、老人はいまもたのもしく思ひ出してゐた。

（これで當分は、さつぱりとする。この上は、早速に新しい隠れ家を見つけ、そこに移つて娘を手元へ引取ることだ。やれ、やれ、江戸といふところはうるさいところだ。）

老人は闇のなかで、につと快心さうに笑つた。

た、た、た……と蹙音が迫ると、

「逸見老人！」

きびしい聲がした。老人の揚げた小田原提灯に浮上つた、眉の迫つた險しい眼の士である。

「おゝ、森氏でしたか、なにか御用かな？」

「千枝どののことでござる。お手前、千枝どのを何處ぞへおかくまひなされたな？」

「かくした？ 滅相な。千枝は御貴殿の交渉を厭うて、自分から家出をしたのだ。」

「嘘を仰有るな——」

「嘘ではない。わしはいまも心當りを探してゐるのだ。おゝ、さうだ。こゝに千枝の書置もある。」

「たくさんだな、老人！。それでお手前は拙者への義理がすむと思はれるかい。すでに先方へ誓つた言葉の手前もある。娘は御隠居の側室と

なるのを厭つて——といへるか。千枝どのが居らぬなら拙者はお手前の白髪首を申請けても、武士の一分を立てねばならぬ。」

「はゝゝゝ、諄い。何度、申されても同じことだ。娘を側室に差出す儀は如何に先方が御直參であらうとも、きつとお断り仕る。」

「おのれッ！」

びゆうんと音を立て、眞向に閃く榎手の大刀だつた。危く避けた老人は腰を捻り様、拔放つと同時に片手薙ぎに白刃を大きく振つた。

「来い！」

正眼に構へる。

「行くぞ！」

雄叫びとともに躍入つた相手は、不覺にも足を踏みすべらして

「あッ」

と、後ろによろめき倒れた。

突嗟に斬りさげようとすると、ぐいと、その腕を支へたものがあつた。

「御老人。年甲斐もない。おやめなさい。」

老人は榎手が逃げ去るのを見届けてから、しづかに振返つた。

白哲な青年である。

「よく、お止めくされました。お禮を申し上げます。」

「お住ひは？ お一人では心許ない。お送り申しませう。」

青年は振返つて、靜かに白哲な顔を微笑ませた。

娘を拜借

約束の時刻である。坂路を發る青年の姿が雜木の間に見えた。すりとした手足が、林の深い緑に、ほのぼのと白い。



それを逸見老人は、近ごろになく晴れやかな顔で、もどかし氣に讀めてゐた。

青年も逸見老人の姿に、微笑み、遠くから會

をした。

「昨やは失禮いたしました。」

青年の元氣で朗らかな聲が、樹立の清澄な空氣に滲み入った。

「おゝよくいらした。何うぞお上りなさい。」

老人は座敷に請じようとしたが、青年は縁に腰をかけただけで、

「いゝ天氣ですな。」

青い朝空を振仰いだ。

「お仕度がよろしければ参りませうか？」

「いろいろお世話にあづかります。」

老人は床の刀掛から大刀を取ると、縁から下りて、

「何うでせう、娘を乗せてかへる駕籠でもあつらへて行きませうか？」

と、他愛なく娘が家へつれ戻せる氣であつた。

「勿論、駕籠も必要となりませうが、先方の寮へ行着いた上でも間に合ひませう。」

青年は老人を憐れみずみられなかつた。

二人は好晴の路を並び合つて歩いた。

崖下の雑木の日影が、袖から袴の裾へ移る狭い勾配道は、木の芽

が鬱鬱とした。嫩葉が爛れてゐる。

登り切つた道は大名の下屋敷らしい練塀に突當る。足元の坂下に雑

木が簇り、木の間の窪地に、櫓の低い長屋が黙々と光つてゐる。微か

に釣瓶の音がする。



逸見老人は、視線を眞つ向の小高い森に注ぐと、

「これはいい、新居は丁度あの森の中ですな。隠れ家には屈強のところでです。」

子供つぼく、指差して有頂天であつた。

「如何な相手でも、あそこまでは探索の手を伸しますまい。これで娘

を高崎どのの邸から引取つても安心できます。日枝さん、こんなこと

で苦勞をするのを嗟、をかしく思ひませう。」

その娘をあづけたといふ數奇屋好みの寮の前へ出ると、いそいそと

冠木門をくゞつて行つた老人であつた。

青年は見送つてから、路傍の樹影に佇んで、田舎出の律義者、疑ひ

を知らぬ老人父娘の運命を案じてゐた。

果して老人は、たつた一人で、玉砂利路を踏み返して來た。

「お娘は？」

「相憎のことでした。一兩日の中に、御直参お歴々の御集ひがある故それまで御拜借願ひたいとのことでした。」

「然うですか。高崎與兵衛といへば前の勘定奉行吟味役、なかなかの利者ですから、交際も廣い。ではそのころまでお待ちなさるより詮方ありません。」

寮の主人の爲人を知り盡してゐるにもかゝらず、かうした心にもないことをいはねばならぬ自分を、青年は寂しくも腹立しくもかんじるのである。

與力と岡っ引

二三寸の立重障子の隙から、白い猫が、すうと這入つた。

と、つゞいて、青年日枝宰一郎が、蕭流し、ゆつたり寛いだ姿で入つて來た。

「甲所、御苦勞だな。」客は、青年の配下の岡っ引甲所惣太と呼ばれてゐる腕利であつた。

「昨日は、お使ひを頂戴致しまして恐入りました。」

「早速だが、ぜひ一つ骨折つて貰ひたい。相手が前の勘定奉行吟味役高崎與兵衛で、娘を一人、無事に助け出さねばならぬといつたら、そちにも事件の全貌がすぐに會得されよう。」

「なるほど、美しい娘を見つけては何彼とわたりをつけ養女に貰ひ受

け、上役の側室に差出すといふ評判の……」

「今度も又それだ。田舎出の律義な武家の娘に眼をつけ、何うやら架空らしい旗本の隠居を作りあげ五月蠅く側室に所望させ、手を廻して娘を自分の寮へあづかると、言を左右に託し武家のもとに返さずにする。」

「太へ男でございますなあ。」

「そこで、甲所。おぬしの手でその娘を救うて貰ひたい。」

「わつしの手で?！」

流石の甲所惣太も、愕いたやうに眼を睜るのを、青年は微笑を含んで見返した。

「高崎與兵衛の菩提寺は湯島麟祥院だ。氣の毒だが、お前は髷を剃つて、麟祥院の役僧に化けて貰ひたい。」

年は若く、白哲な美男子であるが、日枝宰一郎は南町奉行所でも指折の若手與力である。甲所惣太は、浮かぬ顔で、

「髷を切るんですかねへ。髷を……」

と、惜しさであつた。

「いやか。娘一人、いや、その父親ももろともに助けることが出来るのだが……」

「人を助けるのは出家の役といひますが……」

「圓く治まるのはお前の頭ばかりではない。誰一人、傷つかず、四方八方圓満に事が落着くのだ。ついでのこと、そのまゝ麟祥院へ弟子



入して坊主になつても差支へない。」

「冗、冗談いっちゃあ不可ませんや。」

「はゝゝゝゝ」

青年は笑ひながら、後ろの懐から美しい袈裟衣を取り出した。

「ま、待つてください。旦那も氣が早い。退引させずに髷を落さすんですか？」

「お宮仕へのつらいところだ。その代り、首尾よく成功したら、兼ねての願ひの大山詣りを許すでしょう……」

「年は若いけどこまでもそつの無え旦那だ。」

「では、萬事の方策は髪を下しながら話してきかせる。」

「旦那の剃刀ぢやあ、噫、涙がこぼれるこつてせう。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

二人は聲を合せて笑つた。

青 い 痣

四五日を経て、青年は再び老人の隠れ家を訪ねた。

「よくお出でなされた。實は昨日突然、娘が寮から戻つてまゐりました。」

「それは結構でした。」

「結構？——結構には違ひないが」

老人は氣疎い面持で口ごもつた。

「何うか致しましたか？」

いま初めて氣附いたやうに青年はきく。

老人は娘を聘んだ。

矢絰の振袖、黒天鷲絨に銀絲の襷ある帯を締めた娘はしとやかに手を支へた。眼も口も愛らしく、いまにもこぼれるばかりの美しさなのを妬むかのやうに毒々しく青い痣が左の頬を染めてゐた。

「この面體です。」

「なるほど……」

と、頷くと、娘は羞しさうに後ろを向いた。

「このていたらくで娘はかへつてきました。寮へ湯島麟祥院の役僧が見えたせつ、千枝の顔を見て、生死に關する大難相がある、消して進ぜると、指先で左の頬を捺したさうだが、それと同時に見る間に大きく擴がつた痣ださうです。」

「麟祥院の役僧でしたら、掛合つて癒させればよろしい。」

「ところが麟祥院では、高崎氏の寮へ使ひを出した覚えはない。何かの間違ひでないかと、拙者の言葉を受附けませぬ。」

「はてな。待てよ。それはひよつとするとせつかい上人の仕業かも知れませんぞ。」

「せつかい上人?!」

「さうです。眼つきの鋭い、にがみ走つた三十四五、坊さんには惜しいやうな巻舌、鐵火肌で……」

「それぞれ、その上人に相違ない。娘の言葉とびつたり合ひます。」

「はゝゝゝゝゝゝ、上人なら、やり兼ねませぬ。世に稀な智識だが飄逸過ぎて、時々妙なおせつかいを爲るのが評判で、人呼んでせつかい上人といふ……」

「面妖な、その上人は、いつたい何處にをります。」

「なんと拙者の近所、しかも懇親。御都合よろしければ、御案内申しませうか。」

「願ひます。娘、そなたも來い。面體の青痣、掛合つて呉れよう。」
袴の裾をよろめき踏みながら、逸はやく臨の庭におり立つ老人である。

噫 する 上人

お高祖頭巾をかむつた娘が、

「あれあれ、あそこに、いつかの上人がおられます。」

「ど、どこだ?!」

孟宗の敷なかの空氣は青く簇立ち、白く牙えた流れのふちには雜草が黄色い花の顆を彩つてゐる捨石に、けんらんたる袈裟衣にくるまつた剃り立ての頭が、寒さうに噫を怯えてゐた。

「おゝ、如何にも美事な聖ふりだ。……千枝、頭巾を脱れ!」

近づく老人は、相手を鋭く睨め据ゑた。

「上人、この娘を御存知か?」

「知、知つてゐる。」

ぶつきら棒に答へる。

「よろしい。ではおたづね申すが、娘にはいまも生死に關はる禍相がござらうか？」

「や、これは目出度い禍相は消えてゐる。」

「目出度い？！ 黙んなさい。なにが目出度い。年ごろ花の娘に、横面をかけての青痣を残し禍相が消えたも白々しい。さあ、この始末をなんとする。」

大刀の櫛に手をかけ、早くも鯉口を切つた。

「ま、待ちなさい。氣、氣の早い。その青痣を奇麗にしたら文句はなからう。」

俄上人、甲所惣太には手勝手が違ふ相手である。顔色をかへて逃げ腰になつてゐた。

恨めしさうに、こつちの顔を見たのは滑稽であるが、岡つ引の俄作りとしては僧侶姿も先づ上出来といへる。青年は愉快だつた。四人が歩くのは、日影の明るい地面である。

「御免よ。」

枝折戸の内側に跳釣瓶があつた。見覚えのある檐下の柿の木で、ここが岡つ引仲間の家と知つた。

井戸端の椀に水を汲みこんであるのもいひつけた手筈の通りだつた。水も、たしかに普通の色とは異つてゐた。それなのに、

「さあ、この水で顔をお洗ひなさい。痣は立ちどころに消えますから。」

いふと同時に、だゞつと檐下に駆け入つたのは、痣の消えない場合が怖ろしいのだ。よくよく老人の劔幕に劫えたと見え、檐下の雨戸をばたばたとしてしまつた。

千枝が頬に浸した手を水にかへすと、椀のなかの水は見る間に青く染つた。

「やッ、不思議だ。痣が消えた。」

老人が叫ぶと、それを押し止めて、靜かに青年はいつた。

「いや、不思議ではござりませぬ。頬の痣は阿蘭陀わたりの青繪具に工夫したものです。あなた御親子を寮主人高崎與兵衛の手から救ひたいために、わざと美しい御縹緞を汚しました。」

「では、あのせつかい上人は？」

「岡つ引、甲所惣太、今迄おかくし申してゐたが、私は南町奉行所の與力です。」

呆然と青年の白哲な面を覗める父娘の瞳には感謝の涙があふれて來た。

家のなかゝらの大きな噺が立てつゞけに響いたのは、何うやら惣太が風邪でも引いたのらしい。

——をはり——

人生の中心を定める

柔道の真髓と宗教

講道館指南役 三 船 久 藏

柔道と宗教

私は常に柔道と實生活と言ふものを結びつけて考へてゐる。かうした観点からゆけば、信仰と生活と言ふものも相即不離な關係にあると思はれる。

所謂宗教と言ふものについて、あまり深い知識を持つてゐない私が柔道と宗教について論ずることは一寸皮相な淺薄な觀察と思はれるかも知れないが、其の眞髓は必ず一致するものであると信じてゐる。

成るほど私は柔道の研鑽は永年續けてゐるが宗教については殆ど研究した事もない。然し過去に於ける柔道の修業から得た體驗によつて、宗教と言ふものに多少觸れえた様にも思ふのである。このことについては、大方の御批判を仰ぎ、足らざる所を補つてもらひたいと思ふ。

宗教は人生に取つて不可欠なものであり、宗教心を持たぬ人間はないのである。宗教は人間生活の不安を除去する大法である。

すべての人生を認識して行く上に於て、宗教によつて導かれる事は確かな事はないと考へるのである。それは宗教と言ふものが單に物を識ると言ふことではなしに、悟ると言ふ事に其の本質があるからだと思ふ。

つまり物を悟ると言ふ事は、腹の据りを定める事であり常に中心を失はぬ事にある。佛教に於ける、座禪とか、念佛とか止觀などがそれに到る修業の方法ではないかと思ふ。

かゝる宗教が人生に不可欠なものであると同様に柔道も亦其の基を一にすると言ひうるのである。

即ち人間は精神と肉體を切り離して考へる事は出来ない。智育ばかりが發達しても體育が之にともなはなければ健全な人格と

言ひえず、肉體ばかり強くても精神的な高尚さがなくては暴に終つてしまふ。靈肉一致によつて完全な人間が出来上るのである。先づ立派な精神を植ゑ込む上に於ては立派な肉體を造らねばならぬ。

日本人の

體格に

然らば健全なる身心は如何にして作るか、之は廣く人間一般を考へる前に先づ日本人の體格から考へて行かねばならぬ。

近來各種のスポーツが盛んになつてうれしいのであるが、忘れて

ならぬ事は最近に於ける我が國民の體格が各種運動の益々隆盛に赴く様相とは反比例的傾向を示しつゝあると言ふ事である。

されば國民の身心の發達に留意する先達者は大いに研究すべきである。我國には古來大和民族固有の精神並びに體格に立脚した特殊の體育法がある。それは云ふまでもなく、我が民族に自然的に發生した武



術の練磨によつて身心を鍛へることである。

人生は眞劍勝負

武術とは即ち眞劍勝負である。

三 船 八 段

眞劍の内容とは如何なる困難にも打勝つ勇氣を持つて其の難關を突破する事である。即ちあらゆる障害を打ち破つて敵を倒すには自らを捨てゝかゝらねばならない。

そこに始めて緊張した眞劍味が生れて來るのである

而して武道修業の目的は單に技術の練磨に依つて體育を養成し、時に護身の術として活用する狹義のみにあらず、人格の陶冶と云ふ高遠なる廣義の目的がある。

我々の社會生活がすべて法の如くに行はるれば、悪い事さへなされば安心して生活出來ると言ふ理窟になるが、實際は種々な關係で理屈通りには行かぬ。世を脱線した不良暴力の徒もあるので、之に對しても武術を練磨しておれば犯すべからざる威嚴を保ち冷靜な判斷によつて之を制し、悟す事が出來るのである。

之は狹義有形の武術修練の賜であるが、更に其の極地眞髓に徹してこそ宗教とその基を一にする廣義の目的に達することが出来るのである。

無我の境地

けだし世界文化の指導者としての地位を將來に約束されてゐる我が日本民族は其の長き傳統としての豊かなる義理、人情を有し自分を殺して人の爲め國の爲に盡すと言ふ犠牲的精神を持つてゐる。これ等の義理人情や犠牲的精神は日本武士道の本質であり、精華である。即ちこの本質を涵養する上に柔道修業は實に缺くべからざる一大要素であるのである。

之は佛教で言ふ無我の境地である。無我とは小我を捨て、大我に生きる事である。

假令小さな我が肉塊は形の上で亡びても精神は永遠に激湧として存在してゆくことである。柔道修業は實にこの精神を徹底せしむるにある。

人生の過程に於ては、あらゆる危険が重疊として前に横つて居る。それ等を排除することこそ、宗教であり柔道の精神である。即ち、排除とは如何なる場合に遭遇しても身心の中心を失はぬことにある。斯くの如く、柔道は實に身體の中心を定め、進んで精神の中心點を確立



ノ—シンのいいところは服む……スツと痛みが消える同時に、頭の疲れを恢復する……この二つです而かも胃腸等には勿論、安全で、連用すれば頭腦ばかりか、心臓迄も強補する効果あり。これでこそ完成せる模範的頭腦藥と稱せられる所以！

にれ疲とみ痛の頭



四二・四一・錢十五・錢十三

せしむるにあるのである。(をはり)

考養の心をもて、ちよはよをおもくしおもはん人は、まづ阿彌陀ほとけにあづけまいらすべし。わが身の人となりて往生をねがひ、念佛する事は、ひとへにわが父母のやしなひたてたればこそあれ、わが念佛し候功德をあはれみて、わが父母を極樂へむかへさせおはしまして、罪をも滅しましませとおもはゞかならずくむかへとらせおはしませんずる也。

(法語抄二四九)

映・畫・物・語



原作 國木田獨步

— 酒中日記より —

脚色 野田 高梧

監督 齋藤寅次郎

撮影 猪飼助太郎

— 配役 —

辰 二……笠 智衆

民 子……坪内 美子

おげん……岡村 文子

高山先生……水島 光代

おとめ……市村美津子

龜 吉……坂本 武

村の子供達……突貫小僧
爆弾小僧

— 松竹大船作品 —

平和な村も近年の續く凶作で疲弊が甚だしかつた。

青年は村を捨て、都會に職を求め、娘達は家計の爲に賣られて行くのであつた。

小學校の生徒等までが學校を休んでゴルフ場のキャ

デーとなつて、生活戦線に立つ有様であつた。學校では校長先生を始め職員一同がかうした子供等の登校をうながす對策に腐心してゐた。

辰二は高山先生始め同僚と、生徒の父兄を野良に訪問して熱心に其の不心得をさととして子供達の登校をうながした。

辰二等の熱心が報いられて學校を休む生徒も次第に少くなつたが、

或日

辰二は自分の受持の少女であるためが母の入院料を作る爲に百兩で身賣りされると言ふ話を聞いた。

生徒を自分の子供の様に愛してゐる辰二先生には、かうしたみじめな子等の運命を默視する事は出来なかつた。

とめの父六藏にその不心得を説いて職意をすゝめるのであつたが、病苦と貧困のどん底にうめく六藏夫妻は已に百兩の金を受け取つてゐた。貧しい教員生活をしてゐる辰二には百兩の金は大金である。

だが尊い人間の生命には替へ難い。辰二は



決心をした。妻の民子や俠氣な龜吉おちさんと相談して、自分等の家財道具を金に替へるのであつた。しかし貧しい家財道具も百兩の半分に充たないので辰二は龜吉と二人で村の有志に寄附を仰いで廻つた。

同級の生徒等までが、ゴルフ場で働いた金を集めて辰二の義俠を助けたので漸く定額に

達した。

辰二にはおげんと言ふ性のよくない母があつた。隣の村で小料理屋を営んでゐたが、不況の爲に商賣がはか／＼しくなかつたので再三、辰二の月給を無心に来るのであつた。その日も辰二の留守に言ひ寄つて妻の民子を苦しめてゐた。

「母が大切な、何處の馬の骨か分らぬ子供が大切な、どつちですか？」ときめつけられて民子は平生蕭さへも質に入れなければならなかつた。

民子が質屋へ出た後におげんは、辰二の集めた零細な汗の結晶百兩の金が目についた。悴の苦心も考へない彼女は無斷で持ち出してしまふ。

「お前は何の證據があつてお母さんを泥棒呼はりするんだね、この親不孝奴が！」と却つてきめつける母の邪慳な態度に辰二は爲すすべもなくなつてしまつた。



悄然と歸る道すがら辰二は豪農石井の落した三百兩入りの財布を拾つた。期限に迫られた辰二には善惡を判斷する餘裕すらなかつたのだ。

とめは救はれた、だが辰二の心はそれから平靜を缺いて沈み勝ちであつた。

「きつと借りたお金はお返しします。どうか

「暫くの間お許し下さい」

石井の名刺に向つて詫びるのであつたが犯した罪の恐ろしさに

「泥棒！ 鉛筆を返せ」「盗んだんぢやね

えや、拾つたんだい」「拾つても返さなきや盗人だい」

と言ふ子供達の喧嘩をなだめながらも辰二は良心の呵責に堪へ難く悶えてゐた。

苦惱にめつきりおとろへた夫の近ごろを民子はいぶかしく思つてゐたが、或夜、龜吉おちさんと二人で机の中の秘密を知つてしまつた。

其夜

妻の民子は赤兒を抱いて夫の責任を一身に引き受けて井戸の中

へ飛び込んで自殺してしまつた。

「たとへ人を救ふ爲とは言へ他人の金を無断で使つたのは深い罪でした。教壇に立つ身でありながらこの深い罪の前に私は再び諸君の前に立つ事は出来ません。

幸ひ石井さんが許して下さいすつても、妻の民

子が責任を引きうけて死んでくれても、私の罪は償はれないのです。」



て上京する事になつた。

村はづれの小川の岸には、龜吉おちさんを始め高山先生に引率された學童達が見送つてゐた。

「お前達は、この先生の様に間違つた事をしてはいけない。きつと立派な人間になつてくれ。」

と心から呼びかけるのであつた。

……仰げば尊し我が師の恩。

教への庭にも早幾とせ、

思へば、いととしこの年月、

今こそ分れねいざさらば……

哀歌を帯びた別れの歌は故郷の山里にこだまして、辰二の心を思ひ出にうるませるのであつた。

親切な、優しい良い先生であつた。送る生徒も目に一杯涙をためて、いつまでもくく仰げば尊い師の恩を歌つてゐた。

紅涙にむせびつゝ生徒に詫び、良心に叫んだ辰二は龜吉おちさんに妻子の位牌をたくし

(をはり)

鑽仰運動ニユース

法然上人を思慕する

吉田絃二郎氏

文壇の雄として天下に數多のファンを有する吉田絃二郎氏は、先般三十年間生活を共にせられた愛妻明枝氏に先立たれ、非常な悲歎の中に呻吟せられてゐたが、本會が先に氏に法然上人の戯曲を依頼した關係で、これも佛縁の然らしむるものであらうと深感くぜられ、氏の家の宗旨は天台宗であるに拘らず、葬式から佛事一切を鑽仰會にゆだねられた。合僧眞野理事佐藤主事は共に病氣で、中村理事は歸省中で止むを得ず大島法主始め宗務所の里見部長、木村傳通院貫主等を煩らして町重な御廻向を申上げてひたすら冥福を祈

つたところ、吉田氏は非常に感激せられ、悲歎の中にも一道の白光を見出されて此頃では袈裟をかけお經を誦して信仰の生活にいそしんでゐられる、殊にお經を誦するのが最上の楽しみであると言はれる程、生一本の純な心境であり、又この悲しみの中で第一

に開かれた書物は勅修御傳であつて、この悲痛な體驗を通して法然上人へ直參せんと努力せられてゐる。本會で囑した法然上人の戯曲もかゝる貴い體驗を通して生れ出づるのであるから、定めし人々の心を打たずにはおかないだらう。純情の人吉田絃二郎氏が本會を通じて法然上人への思慕を高め、淨土教へ歸依せられた事は、會員と共に喜びに堪へない所である。會の爲に今後出来るだけ御援助したいと語られてゐる氏の心境は、そのまゝ全會員の心であつてほしい。どうか法然上人の爲に折角の活躍を祈る次第である。

直行寺支部の

爽快な晨朝會

北海道小樽市の直行寺支部では去る六月二十五日午前六時より支

部例會として晨朝會を舉行した先づ清涼の氣に充つる山にて午前

六時より六時四十分迄法然上人法語を中心とした佛前回向をなし同五十分朝食同二十分下山と云ふ順序で敬虔な行事を續けた。尚「晨朝の行事は心の掃除」と云ふのが本支部のモットーで今後十月迄毎月開催して信根の培養に努める筈である。

皇太后陛下御使を

法然院に御差遣

京都獅子谷法然院は法然上人開創の寺で、特に上人が住蓮・安樂と共に別時念佛を始め六時禮讃を修せられた、淨土宗徒にとつては忘るべからざる貴い遺跡であるが、昭和十二年六月十九日、畏れ多くも皇太后陛下京都行啓の砌、特別の思召を以て御使御差遣あらせられ、本尊前へ金一封住職へ白絹一匹、御菓子等を御下賜あらせられた。法然院の光榮もさる事ながら上人を鑽仰する吾々にとつても身に餘る光榮である。朝恩の無窮に感激する所である。

會員の聲

▼私は創刊號以來の愛讀者です

「浄土」の誰にも向くやうに編輯された、そして内容充實、實に十錢では安すぎる程の安價さは我々

プロ讀者には感謝に堪へません。

今月の佐藤惣之助氏の「海の話」、
「住蓮と安樂」のやうなものをどしどし下さい(東京・船越やす)

▽答……御愛讀の程、感謝に堪へません、本會發展の爲に、今後とも編輯なり事務なりに就ての忌憚なき御忠言を賜らば幸甚に存じます。

▼默阿彌の研究家飯田光明君の作品は随分待たされただけに、再讀三讀、力作ぶりより來る讀者への迫力は流石と思はれます。このありふれた題材を拉し來つた所に君の野心も覗はれるし、その洗練された筆致ともられた宗教的信念は君の日常を目のあたりに見るやうで幽しく思ひます。斯の如き連

載小説こそ「浮土」誌上誠に相應しく次號が待たれる次第です。新進作家の勞作を今後とも大いに歡迎致します(奈良・黄昏山人)

▽……「住蓮と安樂」はあと一回(九月號迄)で前篇完結します。何卒御愛讀の程を。

▼佐藤春夫先生の御執筆を感謝し、毎月鶴首してゐる者ですが、六月號の「通俗方丈記」に皮相の視察でありませうか私の考では、

「昔の御代には御政治の中心點は一船庶民を憐れむと云ふ所にあつたやうである……この有様は實に嘆かましい事である」と結ばれてありますが、昔だつて今だつて同じではないでせうか(小樽・平井善慈)——佐藤春夫氏宛

▼私は南無阿彌陀佛を絶對的に信じ、業煩惱のかたまりである自己を絶對的に包容してくれる南無阿彌陀佛の御力に驚嘆し、今後我を捨て、南無阿彌陀佛に自分の生命を見出さんとする者であります。甚だ勝手ですが中村辨康先生

著「講話一枚起請文」を、定價代だけの郵便切手を同封しましたから、至急御送り下さい(鳥取・枝野茂男)

▼會員の倍加運動をおこしては如何です。淨青會員も其れに一になつて……想は、同じ想です。贈りものにつかつて貰つては如何です。少し奨励法を考へては如何です。一人でも多く讀んで貰つて一人でも多く共に助かり度いものです。我等の會は我等の手によつて育てませう。サア皆様一人で一名又は二三名と加入して頂けるやうに働きかけませう。本部の方方お目をさまして眠れる私等を起して下さい……たのみます(大阪・念佛寺青年部主任・中易善三郎)

▽……答本部でも出来るだけの倍加運動を行つてゐますが、所期の目的にはなか／＼達しません。が、會員の方々の力に頼るのが最も有効な方法と存じてゐます。今後本部と會員との間を一層緊密して増加運動に猛進します。

「浄土」をお盆の賜りものに

充實せる内容と至廉な定價によつて教界の第一線を確保した本會雜誌「浄土」は從來も正月、彼岸、お盆などの賜り物として好評を博し寺院を通して多部數の注文に接し、その度毎に増刷を續けて來たが今年のお盆にも、既に各方面から多數の大量注文に接しており、係りの者は發送に忙殺されてゐる。殊に今年は寺院以外の在家からの大量注文にも接し「浄土」が特に寺院の布教用書として優れておるばかりでなく、知友間の賜り物としても好評であることを裏書きするもので、單なる娛樂雜誌には見られない現象だと本會事務所では大喜びである。

佛壇を中心とした

明朗工場を訪ねる

森電機株式
會社訪問記

本誌記者

工場に佛壇を

産業日本の基礎を打出すハンマー・モーターの騒音が絶え間なく四圍の空氣を揺り動かしてゐる大森工場地帯の一角。森電機株式會社の社長室。

『別にお話する程のことありませんよ』

と社長さんは愛想よく記者を導き入れながら、謙遜な一言を吐かれる。

……讀者は御記憶のことと思ふが、かつて本誌の昨年三月號に「出世藤の由來」として掲載された信仰美談の主人公、母親と佛の慈悲に魅つて、獨力四十三歳の若さで百二十萬圓の大工場主、二百五十人の従業員の大親となつた青年實業家森新治郎氏。

今記者の前に立つてゐるこの人は、青年の潑刺たる元氣と百戰練磨の闘志に輝いてゐる。しかも誇らざる物腰にはいかにも大家族主義の工場主たる面目が躍如としてゐる。

記者は社長室に隣合つてゐる立派な大講堂と、その正面中央に安置された金色の佛壇に就いて尋ねると

『あの講堂ですか？あれは昨年工場を新築した時から造つてあるのです。もう狭くなつたので屋上へ増築して移さうと思つてゐます。

……佛壇は十餘年前こゝに工場を建てた時から一日も早く安置しようと思つてゐました。

佛壇は一家の中心です。工場も亦一大家族であるのですから、工場に佛壇や神殿を設けるのは當然です。屋上には大神宮様が祠つてあ

ります。』

工員全體を家族と見る氏の宗教的信念は昨年五月現在の大工場が落成すると同時に工場内に大講堂を設け、一間四方の金色まばゆい佛壇を安置し、本尊阿彌陀佛の開眼式は増上寺法主大島大僧正によつて嚴修されたのであつた。それ以後毎月中には、従業員全部が講堂に參集し、淨土宗の勤行式を行ひ、梅窓院住職中島眞孝師の講話を聴いてゐる。當日は午後三時に終業してしまひ、それから始めるのであるが、社長はそれに就いて斯う云はれる。

『その日には全部の人にお供物をお分けすることに定めてゐる。誰れでも最初から本當に信仰的な氣持でお勤めしたり、講話を聞いた



りする者は少ない。だから仕事の早仕舞やお供物を貰ふことが楽しみで出て来る人もあると思ふ。然し、それでも長く續けてゐる中には、キツト神社、佛閣の前を通れば自

然に頭を下げ、掌を合せるやうになると思ひます。それでも私は非常に良いことだと思つてゐます。」

思はず頭を下げさせる言葉だ。

この社長の精神は毎日の始業の時から實行される。

作業開始は七時からだが、六時五十分には社長を先頭に全員が屋上に參集する。屋上には大神宮が嗣られてあつて、そこから宮城を遙拜した後、一齊にラヂオ體操を行ふ。斯うして清新の氣を腹一つばい呼吸してから就業するのである。未だ曾て一人の遲參者も無いと云ふ。これが能率の上にはばかりでなく、個人的修養の上に如何に役立つか。社長の信念はこゝにも行渡つてゐる。

家族主義

1 因果の道理を辨へて良き日本人たれ。

2 神佛を尊ぶべし。

3 勤勞を尊び儉約を重ず。

これが森電機株式會社の標語である。この指導理念が工場の隅々にまで行渡つてゐるところは、次の諸施設に一番はつきり現はれてゐる。

五ヶ年勤續者には黒羽二重紋付一着を授與し、十ヶ年勤續者には伊勢大神宮に參拜せしむる。

等の他の工場では見られないやうな極めて家族的で興味ある方法が行はれてゐる。

女子工員に對しても家族の一員としての心遣ひから勤續一ヶ年を経過した者に對しては三時四十五分で作業を打ち切り六時まで一週三日裁縫を授けてゐる。その際の日給全額を支給してゐる。

尙、最近には、全従業員に福利増進のため保険料金を會社で全額負擔して、従業員全體を被保險者とする團體保險に加入した。

しかも勤續十年以上の者千五百圓、勤續五年以上の者千圓、勤續五年未満の者五百圓と云ふ他會社の振合ひから見れば格段の高額の

保険を男女平等に附したのであつた。

その他賞與、昇給制度、娛樂施設等について、家族主義的な細心な心遣ひが隅々まで行届いてゐる。

この佛教的精神に立つ行届いた家制主義の工場組織の上に社長自身は全社員の実質的指導者として早出晚退、自ら陣頭に先だつて活躍しておられる。

記者は社長の案内で、講堂の佛壇を拜んだが、森氏は

『五時には御燈明を上げることになつてをります』

と云はれる。工場の一隅に輝く燈明の光、この燈明の美しい輝きが全工場を色彩するのであらう。また屋上に上つて大神宮に参拜すると、社長は遙かに北東を指して『この方向が宮城に當ります。毎朝全員が此處に集つて遙拜し、ラヂオ體操を行ふのです』

と云はれた。記者もまたその方に向つて敬虔の念に打たれて頭を下げたのであつた。

川柳と七夕物語

七月七日の夜は七夕祭です。七夕の傳説も色々ありますが、最も汎く信じられてゐるのは、支那古代の傳説だとあるかの牽牛織女の物語です。それによりますと、舊曆七月七日の夜、大空の眞上にある天の河の兩岸に牽牛星（ひこぼし）と織女星（たなばた）とが現れます。この二つの星は一年に一度、七月七日の夜に限つて、天の河を渡つて逢瀬を樂みます。そしてその牽牛と織女が天の河を渡るときは、かさゝぎといふ鳥が翼をひろげて天の河の橋となり、織女星がそのかさゝぎの羽の橋の上を渡つて、相會ふのださうです。

さう信じられて、兒女達は五色の短冊に和歌や詩などを書き、紙を投網の形に劈つて笹竹にくくりつけたものを屋外に立て、祭りしました。七夕祭の事を乞巧奠とも云つたことは、乞巧とは字義どほり巧みになることを乞ふ意味で、若い女子は織女星に裁縫や、機

織の上達することを祈りました。又文字の上達を乞ふためには筆などもくくりつけたさうです。

昔は紙の代りに梶の葉に歌や詩を書いたさうです。これを柳樽の句に見ますと、梶の葉はよんどころなく散らしがき梶の葉へ針妙の手も二三枚と針妙とは、備はれて縫針をする女の事で、何れもその上達せんことを願つたものでせう。

七夕は川を渡つて濡れたまひけれども、七日の夜若し雨が降つたりすると、天の河は汎濫するので、彼女達の一年にたつた一夜の交會もあはれ出来ないことになります。

ひこぼしとたなばたつめと今宵逢ふ天の河戸に波立つなゆめといふ古歌は、彼女達のこの哀切極りない戀情の逢瀬のゆめ安かれとねがふた、何人か古詩人の思ひやりであります。

信^{しん}じた上^{うへ}にも信^{しん}じて行く

— 小^こ消^{せう}息^{そく}講^{かう}義^ぎ — (其七)

中 村 辨 康

歡喜^{くわんぎ}と報恩^{ほうおん}と信仰^{しんかう}

天^{てん}にあふぎ地^ちにふして喜^{よろこ}ぶべし、このたび彌陀^{みだ}の本願^{ほんがん}にあへる事^{こと}を。行住坐臥^{ぎょうじゅうざがわ}にも報^{ほう}ずべし、かのほとけの恩德^{おんどく}を。

たのみてもなを頼^{たの}むべきは乃至^{なにし}十念^{じゅねん}の詞^{ことば}。信^{しん}じてもなほ信^{しん}ずべきは必得^{ひつとく}往生^{わうじやう}の文^{もん}なり。

(和語燈錄) 【法語抄五二・五三】

歡喜^{くわんぎ}から報恩^{ほうおん}

感激^{かんげき}の退化^{たいくわ}

何時^{いっ}も喜^{よろこ}べるやうになりたいものです。

喜^{よろこ}びは信仰^{しんかう}其^{その}ものではありませんけれども、信仰^{しんかう}に喜^{よろこ}びが附隨^{ふずい}して居^ゐてよいと思^{おも}ふからです。

信仰に入つた當初は感激に充ち、喜びに溢れて居りましても、五年たち七年過ぎると、其感情も段々薄くなつて、嘗て経験した程の感激が湧いて來ません。

馴れて來るからでせう。赤ン坊が、漸くにして、一足二足歩けた時、何んなに嬉しいでせうか。今はもう覺えて居りませんが、嬉しさうにニコニコして居る赤チャンの顔を見ると、私達も恐らく其時代に嬉しかつたに相違ないと、昔を想像いたします。

現に私達が自由に歩けるのを、他の不自由な方々の氣持と比較して大いに喜んで居てよい筈ですのに、事實は何の感激も感謝も起つて居ないのはホントにくやしい事です。それと同じやうに自分乍ら自分の信仰を喜べない不徹底さに悔いてもよいと思ひます。

三四年前一月程入院したことがありました。退院する一週間ばかり前に、院長さんが「ボツボツ歩く稽古をなささい」と云はれるので、「變な事を云ふ」と思つて、寢臺から下りて、一足ひろつて見ましたところ、ヒヨロ／＼ツとして足がひろへませんでした。人間なんてホントに弱いものだつく／＼思ひました。それから毎日少し宛周圍の壁をたよりに歩く稽古をしました。日増しに力がついて段々歩けるやうになつたので、毎日嬉しさを覺え乍ら屋上などへも登つたのでした。其時、赤ン坊時代の、もうすっかり忘れて居た「歩く喜び」を想像しても見ました。

そして現在の事實を何の感謝もなく、宛かも之れが當然なものゝ如くに思つて居る私自身の拙ない氣持を反省したのでもありません。信仰もやつぱりそれと同じで、入信當時の喜びを忘れて居る私の拙ない氣持が、此御法語を読む度に強く／＼胸を打ちます。

他の宗教では救はれ得なかつた拙ない私が、如來の本願に依て無難作に救はれる之の確信に到り得た喜びは、何時も感激になつて居なければならぬ筈ですが、現在の事實は當り前のやうな氣持で居るのです。

誰でも経験する
るか

本心の願ひ

から、洵に我乍らあきれてもよい譯であります。

馴れて来て感情が後退して居るからでせうか。

之は必ずしも私ばかりでもなく、昔も色々な人がかう云つた事に就て法然上人に尋ねて居ります。

例へば「念佛しては居るが疎かにして居るのを反省して見ると、まだ私の信仰は不徹底ではないかと存

じますが」と云ふ問ひに對して「急がない道には足のおそいのを何とも思はず、急ぐ道にはそれを歎くの

と同じことで、念佛し乍らも心がしつかりせず、願ひのはげしくないその事を氣にして居るのは既に信仰

があるからで、信仰のないものには決してさうした反省もない」と云つて居られ、また「如來様のことを

思ふと身の毛もいよだつ程に喜ぶべき筈なのにさうでもないのは、煩惱生活には馴れて居てもう達人にな

つて居るけれども、信仰生活は今度が始めて、まだ充分訓練が出来て居ないからだ」と云ふ意味の御言

葉もあるやうに、或は歎異鈔の唯圓坊に對して「天に躍り地に躍るやうに喜ぶべきに喜べないのだから、

いよ／＼如來の御慈悲にすぎる信仰を固めるべきだ」と云ふ意味の親鸞上人のお話もありますやうに、誰

でも度々経験する氣持なのではないでせうか。

と云つて「夫れでよい」と考へるのは餘りにも甘えたいけない事で、心からの願ひは天に仰ぎ地に伏し

て喜べるやうになりたいものではないでせうか。ほんとに如來の本願があればこそ正しい信仰に入り、現

に救はれつゝある自覺を得て、箇人的には何時死んでも差支へないとまでの「安心」した生活をして居る

ことが出来て居る譯ですから、それが何時も新らしい感激になつてむく／＼と心から喜びが湧いて来るや

うになつて欲しいものだと思ひますが、中々思ふやうにはなりません。

然しさうなつて初めて本當の「報恩生活」も出来る譯で、行往坐臥に如來の恩德に報じようとの氣持

も強く強く意識されて來ることでありませう。

信仰の進歩

信仰の充實に伴ふ歡喜と報恩

信仰は無論入信の時を以て確立いたしますが、一度信仰に入つたからと云つて、それで直ちに充分だとは云へません。人の心と云ふものは絶えず變化して行くからです。

またこの變化があればこそ信仰も段々純化され生活も淨化されて行くものです。

若しさうでなかつたら、何時までも同じ状態で居なければなりません。例へば二十年代で信仰に入つたとしますと、五十になつても六十になつても同じ状態で居なければなりません。人間意識は時代思潮に隨應して行くものですから、二十年代と五十年代と其處に二十年も三十年も隔りがありますと、時代思想に大變な相違がありますから、其時代思潮と信仰とに大きな喰違ひが出来まして、生活と信仰とが別々になり、信仰は信仰、生活は生活と遊離したものになつて、信仰生活に大きな破綻を見なければならぬことにもなります。

信仰の概念化

さうなると信仰は頭の問題だけになつて概念化して來ますから、もう信仰とは云へなくなります。信仰の蕊が止まつて居るからです。

そして信仰が生きずに段々枯れて來るからです。

すると他の機縁に觸れて類似宗教と云つた様な正しくない信仰に走り行く事にならぬとも限りません。かうした例はよく耳に致しますが、それは信仰の芽が枯れてからであり、信仰は一定不變なものだとの先入主が禍ひして居たからであります。

無論本質的には千古萬古變らぬものではありませんが、生長し充實する意味での進化はあるべきで、云はば生きて居るものでなくてはなりませんから、礦物見たやうなものではなく、植物見たやうに伸び太りし

歡喜のいろいろ

て行く筈であります。

信仰上の歡喜法悦は、人に依り事情に依り年齢に依り色々な状態があつて、必ずしも一定して居りませんが、年と共に感情が靜かになつて行きますから、昔の經驗と均しいものを再現することは困難です。そして信仰の芽が段々理智や情意や經驗などの肥料を吸収して太つて行き伸びて行くに従つて、法悦も單なる感情でなくなり、其處に或は理智的な擴充となり、或は生活の淨化となり、或は傳道教化の行爲となつて、違つた形で喜びを感じ悦びを味ふことが出来るやうになる筈であります。

かうなりますと、法悦と報恩とはおのづから一つになつて、如來様の御心に添ふやうに生活したい氣持で一杯になります。つまり其の如來様の御心に添ふことが、直ちに報恩であり歡喜であるからであります。初めのやうな純感情的な喜びではないかも知れませんが、その代り其の喜びは浮いては居りません。大地をシツカリ踏みしめて居る喜びであります。雲の上にフワフワとして居るやうなものではなく、現實生活を噛みしめて居る悦びであります。

日本的な信仰

さうなつて來た喜びこそ本當の喜びではないでせうか。また法然上人は「偏へに善導に依る」と仰つて居るやうに、善導大師の信仰に導かれて「念佛」の信仰を確立なさいましたが、善導大師の法悦はむしろ詠嘆的であつて、非常に神秘感情が強いやうで御座います。この點になると、法然上人の法悦はもつと現實的であり生活的であります。つまりは法然上人の方が日本的だと思ひます。

法然上人以前に於て惠心僧都とか空也上人とか色々な人が、善導大師の念佛を受入れましたが、その多くはまだ本當の日本的な受入れ方をして居りませんでした。即ち迎接曼陀羅を見て、往生の喜びを想像し乍ら念佛するとか、如來の光明の中に攝取せられて居る繪に依て、念佛して居る自分の幸福を觀念的に喜

生れつきのま
まに

方法即目的

んで居るとか、又は念佛する喜びを身體に現はして躍り歩くと云ふやうな具合に、純感情的な詠嘆が多かつたやうでございます。

然しそれでは働いて食はねばならぬ現實生活とは離れて居て、歡喜と云ふことは充分現はれて居りましても、本當の生活とは云はれないものがあると思ひます。

武士は武士生活のまゝに、産業従事者は其職業生活のまゝに、浮き川竹の流れに沈む遊女は遊女生活のまゝに念佛して救はれる信仰は、唯だ獨り法然上人に依てのみ表現されたもので、單に如來の光明を詠嘆するだけの感情的な信仰ではありませんでした。

「智者は智者乍ら愚者は愚者乍らに申して生る」

と云ふ信仰は現在の生活を其儘肯定して居るもので、現在生活を肯定することは、やがて現在生活への充實を力強く意識せしめて居り、其充實に依て信仰を一層生活の中に織込んで、信仰生活即産業生活として、そこに感謝と報恩とを感じ且つ現はして行つたものと存じます。

かくの如く大地に足を踏みしめた信仰生活は其儘歡喜の生活であり報恩の生活であります。そしてそこに「行住坐臥にも報ずべし」の行住坐臥が生きて來ると存じます。

最易最勝と「必得」の確信

信仰を獲得し信仰を充實させるに、其方法は色々ありますが、何と云つても最も簡易で最も勝れて居るものでなくてはなりません。其上、其方法は直ちに「目的である」ものでなくては本當の最易最勝であるとは云はれないかと思ひます。

此意味に於て「乃至十念」の本願の規定は最も大切な實行上の規範であります。

一念の充實を
相續して

何故と申しますに此「乃至十念」は「一念から永遠に」と云ふ意味でありまして「一念から十念まで」とか「一生涯から十念まで」とか云ふ數量の規定ではないからであります。

此問題は「一念多念」の問題として、古來から問題になつて居り、法然上人門下に於ても異論異説の出たことですが、若し之を數量の問題にすれば、法然上人時代既に「無念」の新説も出て居たやうに「一念も不必要」とするものこそ、一番徹底して居ると云はねばなりません。もつと徹底的に云へばこちらとしては「無念」と云ふ考へさへ要らぬことで、此方が信ずる信ぜないに拘らず、如來は無緣の大悲を以てあまさず救つて下さるのですから、私達としては煩惱生活のまゝにノホ、ンに構へていたい放題のとをして居ればそれでよい譯で、何も敢へて取り立て、「信仰」が何うのかうのと云ふ必要もない筈だと思ひます。それを「無念」の信仰だの「一念」でよいのとゴテゴテ云ふだけ無駄な話しと云ふものです。かうなつたらもう宗教でもなく信仰でもありません。

だから「十念」と云ふことは決して數量の規定ではない筈であります。

「十」とは最少限度の「滿數」を意味するもので「充分」と云ふのを「十分」と書くと同じやうに「充足」を意味して居ると見て見られない事はありません。

一聲一聲を充足して行く念佛。

其處にのみ方法と目的とが一つになつて居ります。道元禪師の「修證一如」と云つたのと同じやうな意味が受取れます。

だからこそ最少限の「一念」でもよければ、最大限の「永遠」でもよい譯で、此の「乃至十念」の詞の中にこそ信仰を獲得し信仰を充實させる微妙な鍵を藏して居ると思ひます。

また此の「一念一念の充足」なくして、何うして「必得往生」の信仰が念佛の中に感じて行かれませう

雑念はお客様

か。法然上人は「念々毎に往生す」と云はれて居ますが、この「一念一念の充足」があつて初めて自分の心に「念毎の往生」が證明されて行く筈であります。

私達は凡夫ですから、其度毎に充足感に浸されることも出来難いでせうが、さればと云つて、たまには一念一念の充足されない筈ありません。信仰のない時の念佛は論外ですが、信仰のある限りいくら心が散つて居た時でも「十念」やそこらの間ぐらゐは充足したお念佛が出来来る筈であります。

途中に色々な雑念が交つても、それは畢竟御客様は御歸りになるでせう。お客様が歸つて行つたらあとは正念の念佛になつて行く筈であります。そして「必得往生」の充足感を以て御念佛して行ける筈であります。

何も敢てむつかしく考へる必要はありません。

唯だ「頼んだ上にも頼んで行き、信じた上にも信じて行く」ことこそ最も大切なもので、法然上人が、黒田上人に對して、御自分の法悦感情を披瀝され、最後の結論として、「頼んだ上にも頼め、信じた上にも信ぜよ」として、この「乃至十念、必得往生」の文句を數多い經典の中から八字だけ拾ひ出されておすゝになつて居る處を、充分に味つて私達自らの信仰の糧にしたいものだと思ひます。

かくして私達は何時でも喜び得る人ともなれるのではありますまいか。

おことわり

以上で一先づ「小消息」の講話を打切りと致します。甚だ簡單で意を盡くしませんでした、餘り永いのも倦怠を招く恐れがありますので、ザラザラつと素通りしたのであります。實は初めの考へは、此一文はかなり感情に訴へられて居りますから、私達も之を感情でうけ取つて充分に味つて見たかつたのですけれども、折悪しく他のことに追はれて餘裕を持つことが出来なかつたので、遂にこんな雑駁な粗末なものになつてしまひました。誠に相済まぬ次第でございます。深く／＼御詫びいたしますと共に、再び筆硯を新たにして此のうめ返しをさせて頂きたいと思つて居ります。

編輯後記

◆暑熱が急に押し寄せて東京は三十五度近くの高熱を示してゐる。あちこちに狂人や殺人、自殺等の異變が續出してゐる。暑さに負けてなるものか。

◆八月銷夏號は成るべくやんわりと涼みがてらの讀み物にする積りなの、それでも少々硬くなつた事は残念。

◆講道館柔道名人の三船先生に柔道と宗教に關する有益なお話を伺ひえた事は記者いさゝか得意である。讀者諸氏も先生の武勇傳を想起しながら味讀して下さい。

◆北歐の佳人ハンソン女史を九段の寓居に訪れて有益な女史の日本觀を伺ひ得た事は「淨土」の誇であると共に祖上人の遺徳漸く世界的ならん事をよるこびとするのである。因に通譯宮村君に謝意

を表する。君は正大在學の俊秀本夏文部省の選拔で日米學生代表として渡米する。

◆松竹映畫の紹介や編輯部員の銷夏コントは急にまとめたものではあるが、酷熱の折、非頭腦的にお楽しみ出来れば編輯子の光榮とする所。

◆暑氣と病魔の横行する昨今「淨土」の皆さんおからだをこはさぬ様、お祈り致します。(祐輔)

◆暑熱の中に一陣の涼風を送らうとしたのが、今月の編輯方針であつた。昨今の暑熱は申す迄もなく日常の我々の生活は諸々の苦しみ、身にさいなむ焦熱の世界である。この焦熱に爽快な清涼な風を送つて人生を甦生させるものは、佛教の正しい信仰である。

◆この意味で、鎮夏の興味本位の軽い讀物を入れると共に、柔かく親しみ易く書かれた各名氏の宗教味豊かな原稿を掲載した。

◆三船、ハンソンの兩氏は以上の通りであるが、富士川諸岡兩博士の玉稿を頂き得た事も亦本誌の誇りである、兩博士は本誌には始めてであるが、共に學界の重鎮であり、佛教に造詣深く信仰に生きてゐられる名士である。

◆信仰隨筆の中野勉子は本誌お馴染の中野善英氏のペンネーム、その語る所は直截篤明にして、讀者の胸をヒシ／＼打つ。再三再四の御愛讀を乞ふ。

◆其他本誌の記事は總べて面白くやさしく而も一抹の宗教味をたへてゐる名篇揃ひである。熱さをしのぐと共に、念佛の信仰を得らるれば編輯子の本懐とする所である。

◆最後に酷暑に際して讀者諸賢が御健康に注意あらん事を切に祈る次第である。(東)

★

★

淨土 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年七月三十日印刷納本
昭和三年八月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園四丁目二番
振替 東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ケ年 金一圓

(送料不要)

右の一ケ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば「淨土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

！峰高最の書用教布！をれこはに盆お

法然上人
鑽仰會編

念佛讀本

淨土信仰の全般を親切丁寧に説いたのが本書です。執筆者は教界の第一線に活躍する古豪・新進、當代宗教戦線の最前線に立つべき好個の教化書物です。

先きに「淨土」特輯號として好評を博し、諸方面の御要求に應じてこの度、裝を新たに單行本として再版を見た次第です。

内容

生	中村辨康
死	佐藤賢順
佛	大野法道
本願	眞野正順
信と行	石井教道
念佛の集ひ	笹本戒淨
社會生活	島野禎祥
女性	江藤徵英
家庭生活	佐藤春夫
念佛の意義	椎尾辨匡

菊判一二頁、オフセット表紙付
本文五號總ふり假名付

定價 二十三錢(送料共)

講 話 一枚起請文

法然上人の「一枚起請文」が淨土宗教の精髓を盡したものであるのは今更不言を要しませぬ。この簡潔流麗な御一文の中に籠る本當の信仰精神を著者の豊富な體驗と該博な智識に基いて、易しく詳はしく説いたもので、これによつて毎日皆様がお讀みになる「一枚起請文」の正しい意味が、生活に即して、はつきりと解ります。目下非常な好評で、寺院、諸團體から布教用、教化用として多數の注文に接してをります。

多部數購入者への特典

團體、個人を問はず本書を一時に十部以上御購入御希望の向には一割引(九錢)とし、送料は當方にて負担します。但し代金引換郵便はお断り申します。切手代用は一割増しに願ひます。

發行所 法然上人鑽仰會
振替東京八二一八七

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十二年七月廿日印刷納本 昭和十二年八月一日發行

淨土第三卷 第八號

定價金十錢(送料一錢)